304
KA93

新世界理論

河飯捨藏 著

大亞細亞建設社 刊行

2

0001663000

0001663-000

３０４－Ｋａ９３ウ

新世界理論

河飯捨蔵・著

大亜細亜建設社

昭和１６

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２３日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

107

304
KA93

河飯捨藏著

新世界理論

大亞細亞建設社刊行

發行所寄贈本

911
160

序

本書は、既往兩三年間に雜誌『大亞細亞』に掲載せられた諸種の論文の中、目次所載の六篇を集めて、少しく補正を加へたものである。菲才なる著者の、粗雜なる研究作品に過ぎないものであるが、大亞細亞建設社々長笠木良明氏のおすゝめにより、一冊に纒めることにしたものである。日本的世界理論、或は世界的日本理論は、最も重要なる課題の一つと考へられるが、此の方面に關心を持たれる讀者の、何等かの參考になるならば、幸甚である。

昭和十六年二月

著者

目次

第一篇　世界理論としてのエネルギー論……一
第一章　序　論……一
第二章　エネルギーの原理……一三
第三章　團體的エネルギー……二二
第四章　人類世界のエネルギー形態……三三
第五章　世界の發展原理……四四
第二篇　世界新秩序の根本思想……五七

第一章　民主主義の頽廢……五七
第二章　獨裁主義の擡頭……六五
第三章　西洋的秩序の窮境……七八
第四章　東洋的秩序の必然……八八
第三篇　世界秩序の基礎理論……九九
第一章　人類結合の原則……九九
第二章　民族及び種族……一〇六
第三章　國家及び社會……一一三
第四章　國際世界の構造……一二〇

第四篇　世界秩序における群の理論……一二七
第一章　群論の略解……一二七
第二章　自然秩序と群論……一三六
第五篇　東洋文化の眞髓……一四七
第一章　圓融無礙の哲學……一四七
第二章　還元歸一の道德……一五〇
第三章　東洋文化の極致……一五三
第六篇　日本文化の本質……一五七

第一章　遠古の日本文化……一五七
第二章　歴史上の日本文化……一六三
第三章　將來の日本文化……一六九

第一篇　世界理論としてのエネルギー論

第一章　序論

未曾有の變轉期に際會して、全世界の人々は、物の領有が必ずしも萬能の效果を奏せず、個人的自由の主張が毫も幸福を齎さないことを、如實に經驗した。眞に效果を奏し、眞に幸福を齎すものは、何であるか。それを暗中摸索してゐる人々が多いであらう。

之を思想的傾向として觀ずれば、唯物論と唯心論との雙方が、全面的に敗退して、他の何物かゞ登場せんとすることを意味するものである。物質萬能の唯物論と、精神絶對の唯心論とは、相頡頏して、互に反對の立場にあるものであるが、しかも兩者には相通ずる共同の立場がある。それは一言にしていへば、形式主義、即ち事象の形骸に囚れて、其の眞相を把握し得ないことである。唯物論は、客觀的存在とその合法則性とを信奉するもの

であるが、その存在を可能ならしめ、その法則を實行する根源に想到しない。唯心論は、主我的な觀念と自由意志とを信奉するものであるが、その觀念が何によつて生じ、その意志が何の爲めに働くかを追及しない。この相對立する二つの思想の共同の立場は、存在の形式、或は認識の範疇を、無上に信奉することであつて、之を認識の範疇といふ側面より見れば、主觀の形式に絶對に服從する唯物論こそは、眞の觀念論であり、之を存在の形式といふ側面より見れば、客觀の形式を全内容とする唯心論こそは、眞の存在論である。此の點に於いて、この二つの思想は、相通ずるといふよりも、寧ろ全く同一のものである。

斯く、その本質が、形式主義なることに於いて、同一であるのみならず、この二つの思想は又對立主義、個人主義なることに於いて、同一の立場にある。唯物論的思考に於いて、物と物との相互間に、何等の本質的關聯を設けることが出來ないのは、唯心論的思考に於いて、我と他人との間に、何等の本質的關聯を認めることが出來ないのと同樣である。從つて、その無關聯の分裂的思考の發展は、我と世界との對立、自然と人生との對立、階級の對立、黨派の對立等の、對立意識となり、その歸する處は、個人と個人との對立抗爭を出でない個人主義に外ならぬのである。

近世史の特色は、個人主義的文化を主たる傾向とすることであつて、それは要するに唯物論と唯心論との形式主義と對立主義とに盲從して、分裂抗爭の世態を釀成することに外ならなかつたのである。人類が一段と進歩し、歷史が一段と發展する爲めには、人類は斯かる形式主義文化を脫却せねばならぬ。吾々の眼前に展開する未曾有の世界的變亂は、此の進歩發展の爲めの偉大なる努力に外ならぬのであるが、之を思想的傾向として考察すれば、唯物論と唯心論とを共に放擲して、一層眞實にして、一層完美なる、大思想に到達せんとする努力に外ならぬのである。

恰も此の時に當つて、科學の世界に於いても、未曾有の大變革が進展した。物質世界の根底に關する精細なる研究は、質量不滅の假定及び元素不滅の假定乃至物質不滅の思想上

に築かれた舊式科學理論を、根底から革めねばならないことを要求した。質量は決して不滅なものではない。輻射に轉換すれば消失するものである。元素は決して不滅なものではない。酸素を窒素に更へたり、水銀を金に更へたりする試みは、今日世界の各所の實驗室で行はれ、多少の成功を得てゐる。近世科學者の嘲笑の的になつた中世の錬金術師の思想は、必ずしも荒唐無稽なものでなかつたことが、承認された。物質の究極の要素と考へられた電子そのものも、決して不滅の存在ではなく、輻射に轉化して消失したり、或は逆に輻射から轉化して生成したりすることが、實驗上證明せられる。斯樣にして、物質不滅の信念は、根底から崩壞したのである。

更に、物質的存在の基底たり、同時に精神作用の根本形式たる時間、空間、因果律等が、本質的な科學的批判を受ける時が來た。各種の非ユークリット幾何學、非アルキメデス幾何學等の建設は、空間なるものゝ性質が、決して絶對一義的のものでないことを明かにした。相對性理論は、時間及び空間の相對性を說き、そこから流出した物理空間の思想は、力の場としての時空、換言すれば、時間及び空間に先行し、その根源たる力を想定するに至つた。量子論は因果律に根本的な疑問を提起して、確率の法則を主張した。因果律は、一つの原因に一つの結果を伴ふことが、その特質であるが、是は單に事象を概觀して、多くの擇一的な結果を生ずる確率の範圍を、恰も一つの事象であるかの如くに看做したものに外ならない。精密に細觀すれば、その一つの事象の如くに看做されたものは、確率の範圍であつて、その範圍內の事象の中の何れが生ずるかは、原因結果の相互間に於ける一對一の關係を以て律することは出來ない、換言すれば、一つの原因に對して、選擇的な種々の結果を生じ得る確率の範圍があるのである。更に、斯かる確定の不能を主張するものに、不確定性の原理がある。それは、位置と運動量との如き、互に相補的な二つの量を、同時に決定しやうとすれば、正確度に限度があつて、必ず不確定の範圍を生ずる、といふのであるが、その正確度の限度といふのは、人間の視力や觀測器が不完全であるから、そのやうな限度があるといふ意味ではなくして、數學的な本質的意義に於いて、量子

世界には常にそのやうな不確定性を伴ふ、といふことである。

是等によつて、時間、空間、因果律等が、單に相對的、第二義的意義を有するものに過ぎないことが示唆されたのは、主觀的には認識の範疇、客觀的には合法則性の根據が、批判され、その絶對信念が動搖したことに外ならない。時間、空間、因果律等が、人間意識の根本的な、又普遍的な形式であることは明であるが、科學の任務は、人間の意識を超越せる、自然界の本質を究明する所に存するのである。例へば、人間が赤、青等の色として認識するものゝ本質が、電磁波の振動數である、といふことを究明するのが科學である。丁度それと同樣に、認識の普遍形式をなす時間、空間、因果律等を、その認識を超越せる自然の本質に於いて究明するのが、科學の仕事である。その根本的な科學の業蹟が進捗することは、要するに、唯物論と唯心論との雙方が、全面的に退却することを意味するのである。何となれば、存在の根據たり、觀念の基底たるものが、その絶對性を喪ふことは、此の兩者が理論乃至思想として成立することの可能性を失ふことに外ならぬからである。

今や、眞に偉大なるものが、原理として、又思想として、科學界と思想界との全面に出現せねばならないことが、必須になつたのである。此の全面的要求を充たすものは、エネルギー論の外にはない。而して、有らゆる舊套の誤謬を脫却せる、新式のエネルギー論がそれである。

近世の科學史上に、エネルギーなる思想が本格的に登場したのは、蒸汽機關の發明以後、熱力學の研究が盛になつてからである。蒸汽機關は、有機物の燃燒によつて生ずる高溫度を、水を媒介として、機械的仕事に轉化する裝置があるが、それは畢竟目に見えず耳にも聞えない熱と、人間の見聞の可能な機械的仕事との相互間に、轉換の可能なこと、及びその轉換に何等かの尺度が存することを、示唆するものである。二つの事物相互間に、轉換が可能であるといふことは、その二つの事物に共通する何物かゞなければならぬ。今の場合には、熱と機械的仕事とに共通な何物かゞなければならぬ。その何物かゞ即ちエネルギーである。

エネルギーといふ言葉を造つたのは、ランキンであつたが、彼の思想は全くマイヤー、カルノー、ジュール、トムソン等の熱力學研究の先覺者によつて與へられたものであつた。特に、科學的エネルギー論の開拓者として、その第一先覺者たるものは、マイヤーであつた。彼は、エネルギーといふ言葉を使用しなかつたが、力の原因を想定し、それが不可破壞性、可變性、不可秤量性を有することを闡明し、又運動が代數的法則に從はないこと、即ち運動は決して零となり得ず、相頡頏する二つの運動、換言すれば、正及び負の符號を有する二つの運動を、零に等しと置くことは出來ないことを力說した。是等は何れも卓越せる科學的創見であつた。

遂に、熱と機械的仕事との交換尺度が、ジュールの法則として確立せられ、熱機關の基本性質が、カルノー、サイクルとして表現せられ、エネルギーの實質的內容は、漸次闡明せられてゐつたのであるが、更に、劃期的創見として、エネルギー進展の方向を指示するエントロピーの原理が、熱力學の第二法則として確立せられた。是等の理論及び思想は、

自然科學の全面に急速に進展して行つたのであつた。

斯樣にして發展した科學的エネルギー論を、哲學的エネルギー論まで發展させたのは、オストワルトであつた。彼は機械的エネルギー、熱エネルギー、電氣的エネルギー、化學的エネルギー等の種類の外に、容積エネルギー、形態エネルギー、重量エネルギー、心理的エネルギー、社會的エネルギー等の諸種目を提唱し、宇宙の本質をエネルギーの一元に歸し、物質を以てエネルギーの所產とすることは勿論、生命、精神、社會等の諸現象を悉くエネルギーに歸屬せしめたのである。此の思想は、その後の科學の進展によつて、實驗的にも、理論的にも、多くの支持を得た。その顯著なる一例は、上述の如く、質量不滅の思想及び物質不滅の思想の崩壞によつて、物質を以て宇宙の本質と考へる唯物論が科學的に沒落したことである。

哲學的に思考せられたエネルギーは、一切の生成發展の原動力であつて、宇宙間の森羅萬象は勿論、時間空間因果律等の宇宙の構成そのものも、悉くエネルギーの所產に歸せら

れる。そこで、エネルギーなる近代語は、日本の古語の產靈と、全く同義であることが解るのである。近世のエネルギー論は、漸く百數十年を經過したばかりであるが、思想としての日本の產靈論は、數千年前の遠古文化以來のことである。日本の古典が、天地萬有一切の事物を、「成る」及び「生む」といふ動詞を以て說明し、その生成の根源たる產靈を力說したことは、宇宙の根源としてのエネルギーを認め、その恒常性と創造作用とを、素朴ではあるが極めて巧妙に、表現したものであつて、その產靈思想が、古代日本の中心思想をなしてゐたことを思へば、エネルギー論の開祖たり、その本場たるものは、日本であつた、と言ひ得るであらう。直觀と體驗とによつて得られた日本の古代思想が、爾來幾千年間有らゆる變遷を經て、實驗と理論とによつて構成せられた現代科學の歸結として再現したことは、思想上に於ける、エネルギーの恒常性を證明するものに外ならぬのである。

エネルギー論は、唯物論と唯心論との二元的存在論を、一元的生成論に轉化するものである。物理的エネルギー、生理的エネルギー、心理的エネルギー等は、何れもエネルギー

の形態に外ならぬのであつて、一つの形態は、他の形態に轉化するものであるから、後段に詳述する如く、エネルギーの恒常性及び可變性より言へば、物心は一如であり、生死は一如である。唯物論者は言ふであらう。たとひ物質なる名稱を放棄して、エネルギーなる名稱を導入しても、客觀的存在なることに於いて同一ではないかと。然しながら、此の客觀的存在は、主觀的な觀念に轉化し得るものである。而して、斯く轉化することによつて、それは最早存在ではなくして、生成である。そこには、存在と思惟との主從關係などは解消してゐるのである。又唯心論者は言ふであらう。たとひ從來の各種の觀念を退けて、エネルギーの如きものを導入しても、それも同じく一つの觀念ではないかと。然しながら、此の觀念は、觀念者の首肯すると否とに拘らず、恒常性を實現するものであり、その好むと好まざるとに拘らず、客觀に移行するものである、そこには最早我のみの存在を許さず、我と世界との對立をも許さないのである。

斯くして、エネルギー論は、宇宙を一元に歸し、萬有を血緣關係に於いて、家族關係に

於いて、理解するものである。萬有は同一の根源より出でゝ、同一の根源に歸し、多なる如くにして一であり、變化するが如くにして恒常である。それ故に、互に離れることの出來ない一體的關係にあるものである。此の一體的血緣的宇宙觀は、日本の產靈思想に於いて顯著なるものであるが、エネルギー論は產靈思想と同義である如く、その一體主義、家族主義に於いても、同義に歸着するのである。

自然科學の世界に於いては、エネルギー論が一切の科學の統合原理であり、指導原理であることを、今日疑ふ學者は殆どゐない。而して、同樣のことは、社會科學、文化科學、歷史科學等の、所謂人文科學に就いても、言はれねばならない。何となれば、人間社會と自然界とを、原理的に區別すべき科學的理由は、毫も存在しないし、人間の歷史と自然の歷史とを、方法論的に分離すべき科學的根據も、決して存在しないからである。從つて、眞の科學的社會學、眞の科學的歷史學、等々は、總てエネルギー論に立脚せねばならないと考へられる。

第二章　エネルギーの原理

エネルギーの第一原理として、全世界の科學者が承知してゐるのは、エネルギー不滅の原理である。科學理論が賴ることの出來る唯一の確實な原理として、一切の自然科學の基底になつてゐるのが、此のエネルギー不滅の原理である。科學の理論は總て代數方程式、微分方程式、積分方程式等の方程式の形で表現されるのであるが、方程式といふのは、總て左邊に表れる量と、右邊に表れる量とが、等しいといふことを意味するものであつて、物理學や化學で等しいといふことは、一般にエネルギー不滅の原理に立脚するのである。即ち、一つの現象が、他の一つの現象に轉換しても、その系全體のエネルギーは不增不減であつて、前現象に於けるエネルギーの量と、後現象に於けるエネルギーの量とは等しいといふ處に、方程式成立の根據があるのである。此の原理に異議を提起するやうな實驗は、未だ曾て現れた例しがない。

そこで、不滅なるエネルギーが、宇宙の森羅萬象を現ずる爲めには、エネルギーに種々の形態があり、且つ其の種々の形態相互間に、轉換が可能でなければならぬ。何となれば、現象の種類は無限であり、それは無限に置換され得るものであるから。而して又此の事は、科學上自明の眞理であつて、熱エネルギーが機械的エネルギーに轉化し、電氣的エネルギーが熱エネルギーに轉化する、等々の事例は、何人も知らない者はない。それ故に、斯かる可變性は、エネルギーの根本性質であつて、それはエネルギーの第二原理である、といふことが出來る。

實に、エネルギーの根本性質は、その恒常性と、可變性とである。恒常性であるから、變じない一つのものであり、可變性であるから、變ずる多くのものである。それ故に、エネルギーは、變じて變じないもの、一にして多なるものである。

可變性に就いては、一つの制限がある。總て自然界に起る過程には、可逆と不可逆との二種類がある。可逆過程といふのは、過程に與つた物體を再び初めの狀態へ戻すことが出來るのみならず、何等かの方法で、自然界到る處過程の初めの狀態を正しく再現し得ることである。即ち、嚴密な意味に於ける、循環的過程である。之に反して、不可逆過程は、如何にしても、完全に元へ戻すことの出來ない過程である。換言すれば、唯一度きりで、再び現れることのない直線的過程である。總ての機械的、及び電氣力學的現象は、可逆過程である。何となれば、それ等が逆方向に進行すれば、初めの狀態が完全に再現されるからである。然るに、熱力學的現象は、さうでない。例へば、摩擦によつて熱が生ずる場合には、機械的仕事が熱に轉化したのであるが、その熱を機械的仕事に轉化する方法は、最早存在しない。そこで確立せられたのが、熱力學の第二法則即ち熱現象不可逆の原則であつて、それは、エネルギーの可變性に關する一つの制限をなすものである。

熱は自然のまゝでは、必ず高溫度から低溫度へ移るものであつて、それは例へば、地球上で高い位置にある物體は、自然のまゝでは必ず低い位置へ移るのと同樣である。低溫度の物體から高溫度の物體へ熱を移さうとすれば、必ず外部から仕事を加へねばならない。

恰も、低い位置にある物體を、高い位置へ移さうとすれば、仕事を加へねばならないのと同樣である。勿論、物體の落下及び上昇の場合には、落下したゞけのエネルギーを加へて、上昇させることが出來るのであるが、熱の場合には、そのやうな可逆には必ず損失が生ずるのである。このことは、高温度の物體のみが一局所に密集する確率は非常に小であつて、各種の温度の物體が一樣に分布して、その温度を均等する確率が非常に大きいことを示すものである。そこで、熱力學の第二法則の完全な表現としてのボルツマンの表現は、自然界は確率の小なる狀態より、確率の大なる狀態に移らうとするものである、といふのである。此の狀態の確率の對數は、エントロピーと稱する量であつて、以上の第二法則を、エントロピーなる言葉を使用して表現すれば、自然界は、そのエントロピーを增大なる方向に向ふ、といふことになる。

熱エネルギーは、今日では多くの原子又は分子の運動のエネルギーの集合であるといふことが、一般に知られてゐる。而して、熱の出入のある所では、物體の狀態の變化が起るのが常である。即ち、固態、液態、氣態等の相互間に狀態の變化が起り、又氣態に於いて特に甚だしいやうな容積の膨脹或は收縮が起る。熱によつて二種、或はそれ以上の物質間に化學變化が起る場合には、此の狀態の變化及び容積の變化は一層急激に起るものである。そこで、運動のエネルギーといふものは、本來容積に關するものであり、容積に關するエネルギーを、容度エネルギーと名づけることは、オストワルトの提案であるが、此の容度に對して、强度エネルギーがある。例へば、一般力學及び電氣力學に於ける、位置のエネルギーがそれである。而して、運動のエネルギーと位置のエネルギーとは、互に可變であり、且つその總和が不變なる處に、エネルギー不滅の原理が成立するのであるから、宇宙は漸次その强度エネルギーを容度エネルギーに轉換して行くものと見られるのであるが、機械的及び電氣的現象に於いては、それ等は上述の如く可逆であるから、單に熱力學的現象のみを以て、エネルギー一般の價値の下落、或は宇宙の衰頽などゝ觀ずることは早計であらう。

エネルギー論の研究を便利ならしめる方法は、エネルギーの可變性、即ちその形態の變遷に對應して、多くの種類のエネルギーを定義することである。然るに、從來エネルギーの研究は、自然科學の範圍、特に物理學及び化學の範圍に限られた觀があつて、エネルギーの種類も、機械的エネルギー、熱エネルギー、電氣的エネルギー、化學的エネルギー等が、列擧せられるに過ぎなかつたのであるが、是等は一括して、物理的エネルギーと言ひ得るであらう。何となれば、始めの三種が物理的エネルギーであることは明であるし、化學的エネルギーも、今日の如く原子及び分子の構造が闡明せられ、理論化學が量子化學の程度まで發展した現狀に於いては、分子の結合力を主たる內容とする化學的エネルギーは、同じく物理的エネルギーの中に數へる方が、便利であるからである。

以上の外、自然科學界では、學者の便宜に應じて、樣々なエネルキーの種類が擧げられるが、元來可變性を持つエネルギーであるから、その種類に限定などがあらう筈はない。觀測者の觀測方法に應じて、或は考察者の理論體系に從つて、各種のエネルギーが列擧せられるのであつて、如何なる種類であらうとも、その可變性によつて、他の種類に變換せられ得るのであるから、各種のエネルギーは、多にして一なる、一體的エネルギーである。その一體性によつて、恒常なるエネルギーとなるのである。それ故に、エネルギーの種類を限定するやうな必要は毫もなく、又それは不可能なことである。大切なことは、その種類の名稱ではなくして、恒常性と可變性といふ、その性質である。

綜合的エネルギー論に於いては、以上の物理的エネルギーの外に、是非生理的エネルギー及び心理的エネルギーを擧げねばならない。無機自然界と有機自然界とが、二元的な別々の世界ではなくして、一元的な同じ自然界である爲めには、無機自然界の歸結たるエネルギーは、同樣に有機自然界の歸結たるエネルギーでなければならぬ。有機自然界は、無機自然界の基礎の上に、更に高階な發展を遂げたものに外ならぬのであるから、物理學及び化學の統合原理たるエネルギーは、同樣に生物學の統合原理でなければならぬ。實際、吾々が生命と稱するものは、生理的エネルギー及び心理的エネルギーの綜合的名稱に外な

らぬのである。

生命とは何ぞや、といふ問題に就いて、例へば橋田博士の生理學には、生命現象は自然科學的見地から、物質代謝、勢力轉換及び形態變換の三方面に區別して觀察せられ、それ等の原因結果の系列は、常に生體活動といふ全一態に統一されて居り、部分的過程は常に全體への聯關に於いて現出し、その全機の現たる處に、生命の本質があるといふことが、繰返し力說されてゐる。之によつて見れば、生命エネルギー論は、唯一の正しい生命觀であらう。何となれば、物質代謝、勢力轉換、形態變換等の代謝、轉換、變換は、悉くエネルギーの可變性を意味するものであり、斯く可變なるに拘らず、その恒常性によつて、變ずれども變ぜず、多の如くにして一であり、その一體的なる處に、生命の全機性があるのである。從つて、エネルギー不滅の法則が嚴存する以上、生命は無始無終、不滅であるといふ信念は、科學的に正いしものである。而して、斯くエネルギーと生命とが等しいならば、エネルギー的宇宙觀は、即ち生命的宇宙觀であり、それが即ち日本の產靈的宇宙觀に外ならぬことが、容易に了解されるのである。

生命の身體的方面を生理的エネルギーとすれば、その精神的方面は、心理的エネルギーである。吾々の精神作用は、身體作用と交流する處に、本來の働きがある。感覺は、身體の一部分たる感覺器官の變動によつて與へられるものであり、感情や、理智や、意志の作用は、實行に移して、身體に變動を與へん爲めの準備階段である。實行を伴はないやうな精神は、空虛な幻想に過ぎない。而してその實行とは、心理的エネルギーを生理的エネルギーに轉換することに外ならぬのである。

生理作用と心理作用とは、互に可換であるといふことは、吾々の最も直接的な體驗である。若し之を科學上の公理とするならば、幾何學の公理や力學の公理より以上に自明なるものである。從つて、生理作用がエネルギーに歸せられるならば、心理作用も亦エネルギーに歸せられねばならぬ。是等の相互作用はエネルギーの可變性を意味するものに外ならぬのであつて、可變性の反面には、恒常性があるから、精神も亦エネルギーの不滅原理に

よつて不滅性を得るのである。眞の科學的心理學は、上述の如き公理の上に、エネルギー論を基礎として樹立せらるべきものであらうと考へられる。

要するに、エネルギー一般に通ずる原理として、最も重要なるは、その恒常性の原理と可變性の原理とであつて、前者はエネルギー不滅の原理として、周知のことであるが、後者はエネルギー置換の原理して、今後大に研究せらるべきものであらう。而してその理論の構成には、前者の爲めに各種の方程式論が役立つと同樣に、後者の爲めには、數學上の群論が役立つものであらうと考へられる。

第三章　團體的エネルギー

有機物は、太陽の輻射エネルギーの蓄積物である、と言はるゝ如く、地球表面の總ての無機物よりも、强度のエネルギーを保有してゐる處に、その本質がある。有機化合物の一つの分子には、數十個、百數十個、或は數百個の原子が結合して、その大きさは、既に膠質粒子の大きさに達したものがあると言はれる。而して其の尨大なる結合は、一般に吸熱反應によつて成就せられたものであつて、一つの分子の中には多大の熱量が蓄積されてゐるのである。この事は、有機物を燃燒によつて無機物に分解すれば、多量の熱を放出することによつて、容易に了解される。

之によつて、吾々は有機物に於いて特に顯著なエネルギーの形態を定義することが出來る。即ち、多くの原子が結合して、一つの團體を造ることによつて、高度のエネルギーをその團體に於いて保持するやうな、エネルギー形態であつて、是は、團體的エネルギーと名づくべきものであらう。無機化合物にあつては、二つ又はそれ以上の原子の結合は、必ずしも吸熱的反應によつて行はれない。例へば、二つの水素原子は、そのエネルギーの和が極小に達するやうな狀態に於いて、互に結合して一つの水素分子を造る。從つて、その分子を原子に解離するには、多大のエネルギーを加へねばならないのである。此の場合の團體的エネルギーは、マイナスのエネルギーであると言ひ得る。然るに、有機物の場合に

は、そのエネルギーはプラスであり、高度の有機物になるほど、それは莫大なる量に昇る、といふ處に有機物の特性があるのである。

多くの有機分子が結合して、一つの細胞を造れば、生體の單位要素が生成せられるのであるが、そこに於いて、團體的エネルギーは、又一段の飛躍的上昇をなすのである。その證據には、細胞なる團體は(自主的運動を營むことが出來る。自主的運動の力學的本質は、或る有限の分子集團が、運動に關し、他の一切の自然界に對して、獨立の系を造ることである。之を平易に言へば、他の一切の自然界の影響を無視して、或る範圍内に於いて、別種の運動を實現し得るほど、その團體的エネルギーが增加したのである。是れは、要するに、自然界の或る局所に、高度のエネルギーが集積した結果、その局所が獨立の系を生成するに至つたものであつて、それは空間的に獨立の系をなすのみならず、又時間的にも獨立の系をなすのである。即ち、細胞は必ず細胞から生成せられるので、他の何物からも生成することは出來ない。遺傳、或は歷史性と呼ばれるものが、是である。その本質は、高度の團體的エネルギーの保有を、時間的に擴張したものである。而して、斯く空間的並に時間的に獨立の系を造ること、換言すれば、自主性及び歷史性を得るに至つて、此の分子團體は生物と呼ばれるのである。

細胞は又その多數が集結して、個體なる團體を造る。玆に於いて、團體的エネルギーは、その强度に於いても、容度に於いても、一段と飛躍し、生物個體の自主性及び歷史性の顯著なる發展となつて現れる。自主性及び歷史性は、上述の如く空間的並に時間的に獨立の系を造ることであるが、その爲めに必要なものは、精神作用であつて、高度の生物に於いては、それはエネルギーの一種の形態として、心理的エネルギーを形成する程度に至る。特に動物に於いては、此の種のエネルギーは急速に發展する。その理由は、植物は太陽の輻射エネルギーによつて、無機物より有機物を合成するのが主な仕事であるが、動物はその植物を食物として吸收し、一層高階な有機物を生成して、エネルギーの形態を一層發展させるからである。

生物の最高位に達した人類にあつては、その自主性及び歴史性の最高の發展によつて、心理的エネルギーは生理的エネルギーを凌駕する程度に發達し、エネルギーの吸收及び蓄積作用は、他の一切の動物と格段の相違を呈するに至る。即ち、動物は太陽の輻射エネルギーの一次的吸收及び植物を食物とすることによるその二次的吸收を以て終始するのであるが、人類は道具を使用することによつて、食物以外の方法を以て、自然界の各種の形態のエネルギーを吸收し、之を利用するのである。

石器、青銅器、鐵器等の使用は、要するに力學的エネルギーの利用に外ならぬのであるが、發火方法の發明によつて、有機物を隨時隨所に燃燒し得る技術を知つたことは、熱エネルギーの利用であつて、人類の歴史は之によつて一變されたのである。而して、熱エネルギーの利用は、近世に至つて急激に發展して、大規模な動力の形態に於いて利用する熱機關の發明となり、人類の歴史は之によつて再度變革されたのである。それ以來、人類の利用し得る大規模な自然エネルギーの探求は、動力發生方法の各種の研究及び發明として

急激に進展し、流水の機械的エネルギーの利用、及び水力並に火力を電氣的エネルギーに變換し、發電機及び電動機なる兩種の機械によつて、力學的エネルギーを電氣的エネルギーに變換し、その電氣的エネルギーを力學的エネルギーとして再生する裝置は、今日全世界に實施せらるゝに至つた。

人類が、斯くの如く擴大なる自然の勢力を利用吸收することは、各個人がその生理的エネルギー及び心理的エネルギーを別々に發揮しては不可能なことであつて、各人が集合團結し、その生理的エネルギー及び心理的エネルギーを結合することによつて、始めて可能となるのである。その理由は、結合によつてエネルギーの作用能率が增加するからである。而して、人類は食物以外の方法によつて、多くの自然エネルギーを利用吸收する處に、他の一切の動物と格段の相違を生ずること上述の如くであるから、その自然エネルギーの利用吸收の爲めに必須な集合團結の作用は、人類の本質的性能であつて、團體的エネルギーは人類に於いて最高の形態に達するのである。

エネルギーは、有機世界の各段階毎に飛躍した。此の飛躍といふことには、重大な意義があるのである。エネルギー不滅の原則に從へば、無より有を造ることは不可能であるから、その變換は常に方程式を滿足するものであつて、飛躍は有り得ないやうに思はれる。然るに、有機物に於いて特に顯著な團體的エネルギーは、他の各種のエネルギーを吸收同化し、團體に於いてその高度のエネルギーを保有する形態であつて、斯く吸收同化された各種のエネルギーが、飛躍の要因をなすのである。故に、エネルギーの飛躍は、勿論エネルギー不滅の原則を滿足するのである。此の事は、原子の定常狀態の飛躍や、化學反應に於ける、分子エネルギーの飛躍等の例を推想すれば、容易に了解されるであらう。

植物は太陽の輻射エネルギーを一次的に吸收同化して、他の一切の無機自然界より飛躍するのであるが、動物はその一次的吸收の外に、植物を食物として、二次的吸收同化を行ふことによつて、植物より飛躍し、更に人類は、食物以外の道具なる方法によつて、多くの自然エネルギーを吸收同化して、動物より飛躍するのである。故に、生物學に於いては人類は動物の一種として取扱はれてゐるが、もつと深い科學的見地に立てば、動物と植物のと間に段階を設けるのと同樣に、人類の動物との間にも段階を設けねばならないのである。

人類の團體的エネルギーは、その團體構成員たる各個人の生理的エネルギー及び心理的エネルギーの總和の外に、各人の結合によりエネルギーの作用能率が增加することによつて可能となる各種自然エネルギーの吸收同化を合同したる概念である。而して、生理的エネルギー及び心理的エネルギーの作用能率は、一般に結合する個人の數が大なれば大なる程增加するものであるから、その結果として、各種自然エネルギーの吸收同化は、團體が大なれば大なる程增加することゝなる。二人が團結して三人の力を得、五人が團結して八人の力に飛躍する、等々の事例は、此の理によるものである。

廣く自然界を通觀すれば、多くの單位要素が集合して、一つの團體を造る際には、プラス又はマイナスのエネルギーをその團體に於いて保持するといふ點に、團體結合の契機があるのである。故に、その團體のエネルギーは、各構成要素のエネルギーの總和とは異

り、そこに必ずエネルギーの飛躍がなければならぬ。その飛躍によつて、團體は多くの個體の集合といふ狀態から飛躍して、それ自身が一つの個體たる地位を得るのである。エネルギー一元論に於いては、物質も精神も總てエネルギーであるから、個體は一つのエネルギー粒子と考へられる。そこで、以上述べたことは、多くのエネルギー粒子の集合が、團體的結合をなすときは、その團體は又一つのエネルギー粒子になる、といふことである。その際、前のエネルギー粒子と、後のエネルギー粒子との間には必ずエネルギーの飛躍がなければならぬ。電子又はプロトンなるエネルギー粒子が、原子なるエネルギー粒子に飛躍し、原子なるエネルギー粒子が、分子なるエネルギー粒子に飛躍し、分子なるエネルギー粒子が、細胞なるエネルギー粒子に飛躍し、細胞ななエネルギー粒子が、生物個體なるエネルギー粒子に飛躍するのは、皆此の例である。それ故に、人間も亦一つのエネルギー粒子である。粒子と言へば、何か球狀のものを想像するが、こゝに言ふ粒子は、そのやうな幾何學的形狀に拘らず、一つの閉ぢたるエネルギーの系と云ふ意味であつて、その形狀から云へば、原子、分子の如きものも、必ずしも球狀ではないのである。

そこで、エネルギー粒子たる人間の多數の集合が、上記の如く團體的結合をした場合には、その團體は又一つのエネルギー粒子に飛躍するのである。此のやうな團體の代表的なものは、近代に於いては國家と稱せられるものであるが、古代には部族、家族その他の名稱を以て呼ばれるものであつた。それ等が單なる集合、或は通俗觀念に於ける群ではなくして、團體であるといふことは、上述の如く、エネルギーに飛躍があり、時間的並に空間的に獨立の系を造るといふことであるから、生物に共通な時間的獨立系の要因をなす血緣關係、即ち親子、夫婦、兄弟姉妹の關係、及び空間的獨立系の要因をなす共同生活の關係が、是等の團體構成の自然的な要因をなすことは明である。而して、一團體が、食物の獲得及びその他の自然エネルギーの利用同化に就いて、共同作業と共同生活とをなすことは、生命現象の特性たる物質代謝及び勢力轉換が、その團體を一丸として行はれることを意味するものであつて、生物學的見地よりするも、その團體は明に一つの生命體で

ある。

乃ち、生物個體以上の生命體が玆に生成せられたのであつて　生命體はエネルギー粒子と同意義であるから、エネルギー粒子の最高形態として、生物個體を超越せる粒子の生成を見たことになるのである。勿論、個體の心理的エネルギーを以て、此の團體を生命體として認識することは頗る困難であつて、それは恰も細胞の心理的エネルギーを以て、その集合團體たる生物個體を一つの生命體として認識するのが困難であるのと同様である。

人類が、今日の如き大發展をなし、他の一切の動物と格段の相違を生ずる に至つたのは、此の團體的結合力に格段の性能を有するからである。原始時代に於いても、人類は他の一切の動物に見られない高度の團體的生活をなしたものである。それ故に、團體的エネルギーが著しく發達し、之によつて他の動物の企て及ばない各種自然エネルギーの利用に成功し、萬物の靈長たる地位を確保したのである。それは恰も原生自然界に於ける、炭素原子の性能に類似するものがある。他の總ての原子は、高々數個の團體的結合をなし得るに過ぎないのであるが、炭素原子はよく數十個より百數十個乃至數百個に達する高階なる團體的結合をなし、その間に各種の非金屬元素は勿論、マグネシュム、鐵の如き金屬元素に至るまでよく之を吸收同化し、その卓越せる團體的エネルギーを以て各種の有機化合物を生成し、原生自然界より格段の相違を生ぜしむるに至つたのである。

宇宙進化の基準として、低階なる存在より高階なる存在に移る因子は、團體的エネルギーである。一切の生物は、此の團體的エネルギーの高度の發展の所產である。而して人類は、生物界に於いて團體的エネルギーの最强度なるもの、換言すれば、全自然界に於いて、團體的エネルギーの最强度なるものである。人類の科學的本質論の第一歩として、此の事實を確認せねばならぬ。

第四章　人類世界のエネルギー形態

力學的に定義せられた、エネルギーの二つの根本的な形態、即ち位置のエネルギーと運

動のエネルギーとは、自然界の一切の存在と活動との原由である如く、又人類世界の一切の存在と活動との原由である。人類が高度の團體的エネルギーを有することは、既述の如くであるが、此の團體的エネルギーは、一種の位置のエネルギーである。何故なれば、一つの集合とその環境との間に、エネルギーの強度に差のあることが、その集合をして團體たらしめてゐるのであつて、強度の差に依るエネルギーの形態は、位置のエネルギーに外ならぬからである。生物個體の場合には、その個體と環境との間にエネルギーの強度に差のあることが、その個體をして自主的運動を可能ならしめ、一つの力學的系を生成せしめるのであつて、此のことは頗る明瞭であるが、多くの個體が結合して、その結合體が一つの活動單位として、團體となる場合にも、此の理は全く同樣である。斯樣な強度エネルギーが如何にして生成するかは、主として團體の內部組織の問題であつて、團體の位置のエネルギーは、即ちその內部エネルギーである、といふことが出來る。

位置のエネルギーは、運動のエネルギーに轉換する。勿論、その逆も可能である。而して、その轉換にエネルギー不滅の原理が成立することが、力學の根本原理である。そのことを平易に言へば、位置のエネルギーが大なれば、それに比例して運動のエネルギーが大であり、位置のエネルギーが小なれば、それに比例して運動のエネルギーが小である、といふことである。そこで、人類の團體のエネルギーが大なることは、それに比例してその團體の運動のエネルギーが大なることである。此の運動のエネルギーは、外部に働きかける力であつて、前述の內部エネルギーに對して、外部エネルギーといふべきものである。

斯樣に通觀すると、人類の團體は、總て內部エネルギーと外部エネルギーとによつて成立してゐるのである。具體的に、それ等が如何なる內容のものであるかを究明するには、嚴正なる科學的態度を以つてせねばならぬ。吾々は先づ動物一般の內部エネルギーと外部エネルギーとに就いて考察しやう。動物は、生むこと、食ふこと、死ぬこと、の三つの契機によつて、その世代を交替しながら、歷史的に及び地理的に、その强度エネルギーを維持して行く。而して、その强度エネルギーは、直接又は間接に植物を食物として攝取し、

それと共に空氣、水等の無機物を攝取し、是等を同化蓄積して、その體組織を造ることによつて維持せられる。即ち、動物の內部エネルギーは、その體組織の生成に依存する。而してその外部エネルギーは、體軀の運動によつて、その組織物質を酸化消費することによつて發現せられる。運動の目的は、主として食物を獲ることであり、運動の實質は、その食物によつて得られた高度の有機物を酸化し、炭酸瓦斯、水蒸氣等の無機物に還元することである。生むことは食ふことを目的とし、食ふことは生むことを目的とし、共に內部エネルギーの保存及び擴張の作用であるが、その半面には、必ず死ぬことを伴ふ。それは體組織を破壞する作用であつて、外部エネルギーの最終的發現である。從つて、之を通觀すれば、動物の外部エネルギーは、太陽エネルギーの蓄積物たる植物を消費する運動であり、その內部エネルギーは斯かる運動を維持する組織である。

生むこと、食ふこと、死ぬことの規定に束縛されることに於いて、人類も動物界に籍を置くものであるが、食ふこと以外の方法を以て、有機及び無機の廣汎なるエネルギーを攝取して、人類は動物より飛躍したことは、既述の如くである。此の人類獨特のエネルギーの攝取は、直接各人の體組織に同化される性質のものではなく、其の攝取の方法が團體的である如く、その利用效果も亦團體的である。即ち、廣汎なる自然エネルギーを攝取して、その位置のエネルギーを著しく增大する主體は團體であり、その大なる位置のエネルギーを大なる運動のエネルギーに轉換する主體も團體である。

斯かる廣汎なるエネルギー轉換の內容は、一言にしていへば、破壞と消費である。金屬或は非金屬元素及びそれ等の化合物に、特殊の形態を與へて、道具或は機械として使用し、又は各種の有機無機の物質の化學結合の態樣を變換し、それ等を製造品として消費することは、何れも自然界に於ける物質の排列を變換することに外ならぬが、使用或は消費の終局の結果は、常に元素或は化合物のエネルギー價値を低下し、それ等を低階なる化合物に轉落せしめることである。而して、最も大規模な自然エネルギーの利用たる熱原動力の發生裝置に於いては、莫大なる分量の有機物を燃燒して、無機物に低落せしめるのであ

つて、食物としての有機物の消費に劣らない大量の有機物の消費である。電氣エネルギーの利用は、今日の狀態に於いては、主として機械的エネルギーから轉換せられ、未だ原始的に電氣エネルギーを利用することに成功しないが、將來原子を破壞して、その電氣エネルギーを直接に利用する方法の發明に成功すれば、動力の新なる源泉となるであらう、乃ち、從來の熱原動機は、有機分子の破壞によつて成立するものであるが、將來の電氣原動機は、原子の破壞によつて成立するものであらう。而して、是等に共通の本質は、物質として貯藏せられたエネルギーを、輻射のエネルギーに轉換して、エネルギー價値を轉落することである。

斯くして、人類の團體的外部エネルギーは、廣大なる破壞消費の作用を意味するものであつて、それは、動物の外部エネルギーの破壞消費作用に比して、格段の相違がある。若し、破壞は惡であり、破壞者は惡魔である、といふ宗教的感情に從へば、人類は惡魔の最たるものであらう。然し、科學は、そのやうな宗教的感情を容れないのである。破壞消費

も宇宙の作用でそり、その擔當者は、自然界に於て必要な使命を擔ふ者である。故に、その使命の遂行は、聖とせられねばならぬ。

人類の團體的內部エネルギーは、その外部エネルギーに對應するものである。大なる破壞消費の作用が行はれる爲めには、大なる建設蓄積の作用がなければならぬ。前者は外部エネルギーの內容であつて、後者は內部エネルギーの實質である。團體は、多數人の集合が或る結合法則によつて、組織の程度まで發達し、單體として自主的な活動性を得、多數の集合が一つの粒子的結合を成就するときに、エネルギー狀態の飛躍によつて生成されるものである。人類の團體は、上述の如く、廣汎なる自然エネルギーを利用吸收することを特長とするものであるが、その利用吸收を可能ならしめる主體は、多數人の生理的エネルギー及び心理的エネルギーの結合によつて生ずる團體的な有機エネルギーである。之を、國家的エネルギー、社會的エネルギー、世界的エネルギー、等と名づけることも出來るであらう。その實質は、人と人との結合を基礎とする內部組織及び內部活動である。

外部エネルギーに於いては、人類は破壞消費の主體として、最惡の存在の如くに見える
が、內部エネルギーに於いては、建設蓄積の主體として、最善の存在の如くに見える。而
して位置のエネルギーと、運動のエネルギーとが、相均衡する如く、破壞と建設とは、相
均衡するものである。從つて、上述の感情的な言葉を用ふれば、善と惡とは、相均衡する
ことが、エネルギー不滅の原理の必然である。之を個人に就いて言へば、善人の半面は惡
人であり、惡人の半面は善人である。演劇や小說に出るやうな、善ばかりの人、或は惡ば
かりの人といふものは、實際の世界には存在しないのである。而して此のことは、團體の
性質及び活動に就いても、全く同樣である。

團體がその合同團結力によつて、高度のポテンシヤルエネルギーを獲ることは、之によ
つて强大なる破壞運動のエネルギーを實現せんが爲めである。今日の文明國家に於けるや
うな、廣大なる團體組織と廣汎なる自然エネルギーの利用とは、人間が單に衣食住の目的
の爲めに、乃至は平和なる生活の爲めに必要とする程度を遙に超過せるものであつて、そ
の超過エネルギーは、概ね團體相互間の爭鬪の目的に消費せられる。人類の爭鬪手段は道
具の使用によつて、體力以外の自然エネルギーを利用する所にその特質があり乃、槍弓矢
等の力學的エネルギーの利用を主としたる古代の戰法に於いては、體力は尙ほ爭鬪力の主
要なる部分を構成したが、火藥の發明によつて、有機物の分解に伴ふ氣體壓力のエネルギ
ーを、破壞の主要方法として採用せられるに至つてからは、人は單に操縱の主體として、
その生理的エネルギーと同程度或はそれ以上の程度に心理的エネルギーを要することゝな
つた。火器の發達に續いて、熱原動機を戰鬪に活用することは、海戰に於いては勿論、陸
戰に於いても所謂軍の機械化として、近代戰の一大傾向となり、特殊物質の化學反應を利
用して人馬を殺傷することを目的とする有毒瓦斯の使用は、これと同時に漸次に擴大する
傾向にある。將來は、生物學的兵器としての特殊細菌の利用、及び電氣エネルギーを利用
する各種兵器の實現は必然とされてゐる。

是等の各種科學兵器を利用する近代戰の效果は、人畜の大量の破壞と、地上物質の大量

の消費とを意味するものであつて、地球表面に於ける破壞消費作用の頗る活潑なる運動である。人類が地球表面に複數の團體を組織し、その各團體の內部エネルギーが、生存と繁殖とによる動物的破壞消費作用を超過する以上は、その超過エネルギーは、團體相互間の爭鬪によつて、破壞消費の爲めに使用せられる外はないのである。若し、團體間の爭鬪が無くして、大量の超過エネルギーを容するならば、それは必然に團體の自壞作用に向けられる。即ち、本來合同團結を目的とする內部エネルギーは、その團體內に於いて、分裂抗爭の運動のエネルギーに轉化し、同胞相殺の現象を呈するのである。所謂個人主義、自由主義の社會は、此の傾向を象徵するものである。

文明國家或は文明世界は、大量の餘剩エネルギーを有する國家或は世界である。そこに必然に生起する現象は、國家間の戰爭か、或は內部的腐敗分解による自滅作用である。敵國外患なければ、その國亡ぶといつた古人は、此の眞相を道破したのであらう。世界永久の平和幸福といふ理想は、單に宗敎的空想乃至迷信に過ぎない。人類は動物より飛躍して、建設の方面に於いて動物より偉大になつたと共に、破壞の方面に於いても動物より偉大になつたのである。神性を獲得したと共に、惡魔性をも獲得したのである。單に平和の一面、神性の半面のみを高唱して、破壞の一面、惡魔性の半面を陰蔽することは、大なる錯覺にあらずんば、大なる虛僞に陷る。此の錯覺と虛僞との代表的なものは、猶太思想であるが、尙ほその他にも全世界に彌漫する多くの類似思想がある。それ等の爲めに世界は幾千年の間如何に多くの無用の慘害を蒙つたことであるか。眞實は詭辯によつて變更せられるものではない。虛僞の平和博愛生活の眞相は、有らゆる僞善、僞瞞を以て終始する爭鬪か、或は腐敗墮落の自滅作用であつた。人類が斯かる妄想、迷信を放擲することは、世界淨化の第一步でなければならぬ。

團體間の爭鬪を否定して、所謂世界の恒久的平和の理想が實現するのは、極めて可能性の少い唯二つの場合に限られる。其の一つは、人類がその生活程度を動物的生活の程度まで低下して一切の發展を放擲することである。他の一つは、自然界に全人類の團結的抗爭

を必要とするやうな、人類以外の外敵が、生物的原因によるか、或は物理的原因によるか、大なる破壞力を持つて、全人類の存亡に關する强敵として出現する場合である。何れも全人類の壞滅作用を意味するものであるが、此の二つの場合を除く外は、國家間の戰爭は必然であり、必須である。故に、內部的平和の達成と共に、外部的戰爭の遂行は、人類の宿命的な、又正當なる使命であつて、若し此の戰爭を回避すれば、必ず內部的に解體作用を生じて自滅に至るものである。

第五章　世界の發展原理

人類世界の發展は、時間上の經過として記憶せられ、歷史として觀察せられるものであるから、世界の發展原理は、換言すれば歷史の法則である。歷史を一貫するそのやうな法則が、恰も物理上の法則のやうに、存在するか否かといふことは、多くの論者によつて論ぜられたことである。人類は自覺的に行動して、自らの歷史を造るものであるから、その

やうな客觀的法則の存在を許さないといふ主觀說と、歷史は人類の意識を超越して、その意欲すると否とに拘らず一定の方向に進むものであるといふ客觀說と、此の兩說の中間にあつて、歷史の客觀的進展を或る主觀的な條件に繫らしめる折衷說とがある。それ等は何れも一面の眞理を現すものであつて、見方によつて、正しいとも、或は正しくないとも見られるであらう。主觀說の言ふ如く、人間は意識的に行動するものであるが、その意識が常に完全なものとは限らない。世界に多くの迷信、妄想、誤れる思想の橫行することは、人間意識に不正の部分が甚だ多いことを證明するものである。若し人間意識が正しいならば、歷史はその意識する通り、意欲する通りに創造されるであらう。然しながら若しそれが正しくないならば、歷史は人間意識を超越して、その意欲する所と異る方向に進むであらう。若し又その一部が正しく、一部が正しくない場合には、歷史は一部分その意欲する方向に、他の部分はそれと異る方向に進むことゝなるであらう。科學は、要するに人間意識を成る可く正しくしやうとする努力である。その爲めに、各人の多くの經驗を綜合し、

多くの人々の經驗を蒐集して資料となし、それ等に基いて客觀的に考察することを手段とするものであるから、それによつて得られる判斷も、客觀的な法則として表現せられるのであるが、その目的とする所は畢竟、正しい意識の資料を提供して、正しい行動に資せんとする、主觀的な意欲を出でないのである。

世界の本質をエネルギー論的に考察し、歷史をエネルギー論的に觀察すれば、世界の發展原理、換言すれば歷史の法則は、客觀的に存在するものと斷ぜざるを得ない。此の場合、問題になるのは、その歷史とは何であるか、といふことである。從來、世界歷史といへば、民族の興亡史を指すものである、といふのが一般の通念であつた。然るに、近世に至つて、國民經濟組織乃至經濟生活の一面を特に偏重して、その方面のみから世界史を通觀しようとする學說を生じ、奇拔な觀察點が一部學徒の興味をそゝること〻なつたのであるが、經濟史、政治史、文明史の如きは、何れも民族內部の一面的觀察を基調とするものであつて、それ等と共に民族の外部的活動から生ずる戰史、外交史等は同樣に重要なるものであり、それ等內外の各種觀察點を綜合せる民族の興亡史は、當に世界歷史の正當なる概括的表現でなければならぬ。言ふまでもなく、歷史は時間の經過の中に生成する根本的事實は、家族、民族、種族立するものであつて、人類が時間の經過といふ根本要素の上に成等の血緣的集合と、それ等の集合が外部的並に內部的必要に促進せられて軍事的、政治的、經濟的、並に文化的な各種の結合法を創造し、民族國家を生成するといふことである。從つて、その民族の興亡史、それは單に外部的な興亡盛衰を意味するに止まらず、內部的な興亡盛衰をも意味する全體的民族史を、世界的に通觀するものが、世界歷史の本筋でなければならぬ。

歷史の本質を斯樣に解すれば、吾々は極めて平明率直な、又最も普遍的な意味に於ける歷史の法則を、直に觀取することが出來る。それは、團體的內部エネルギーの强大なる民族が興起して、他の民族を併し呑、その團體的內部エネルギーの劣弱なる民族が衰微して、他の民族に併呑せられるといふことである。是は、殆ど何人も承知する歷史觀の通則

であるが、同時にそれは、歴史のエネルギー法則に外ならぬのである。此の法則は、換言すれば、優勝劣敗の法則であつて、極めて無慈悲な自然則の如くに感ぜられるが、一層深くその意義を追及すれば、自然の廣大なる發展法則の根本義が窺はれるであらう。

既に屢々述べた如く、エネルギーは一體的なものである。その現象形態に於いては、彼我の差、自他の別があるが、その本質に於いては、一體、一如なるものである。特に優者たるべきものを愛して、劣者たるべきものを憎み、爭鬪を惹起して勝敗の結果を運命ずけるといふやうなことが、一體的なる自然界に有るべき筈はない。然るに、そのやうな現象が頻々と歴史上に現出するのは、何故であるか。若し吾々が觀察眼を擴大して、自然の歴史、或は宇宙の歴史を考へるならば、よくその眞相を窺ふことが出來るであらう。宇宙間の萬有は、その全體に於いても、或は又その一部分に於いても、相互に依存する團體的存在者として、團體的エネルギーを存在の必須條件とする。若し一つの團體が、內部的の退化解體作用を生じて、團體的エネルギーの衰頽を來すならば、その團體構成分子は、一層強力なるエネルギーを有する他の團體に吸收同化せられて、その所屬態樣を更新するのである。例へば、一個の生物はその身體の有機組織といふ團體的エネルギーに依つて生存するものであるが、そのエネルギーが衰頽して死の現象を生ずることは、有機體が解體して、その構成分子が自然界の他の團體系統に歸入すること、詳言すれば、有機體から無機自然界へ、その所屬系統を變更することに外ならぬ。一切の物理學的、化學的、乃至生物學的現象は、これに類する團體系統變換の作用、換言すれば、團體的エネルギーの消長によつて惹起されるものである。而して、此の原理は、人類世界の歴史にも、そのまゝ適用されるのである。人間は必ず民族國家の國民であり、その國家の團體的エネルギーが衰頽して解體作用を生ずれば、他の強力なる團體的エネルギーを有する國家に吸收同化される外はない。何れの國家にも屬しない放浪の民、或は世界人なるものは、一時の過渡的現象乃至は單なる空想的觀念に過ぎないものであつて、自ら國家を亡ぼしたものは、他の國家に歸屬する外はない。優勝劣敗の優勝者とは、征服侵略等の手段によつて、此の吸收同化

の作用を實行するものであり、その劣敗者とは、被吸收者、被同化者の謂に外ならぬのである。

斯くして戰爭は、二つの相對立する民族國家を、一つの民族國家に同化吸收せんとする作用、換言すれば、團體的エネルギーの强度の發展、その一體的恒常性に基く形態の置換に外ならぬのである。勝者も敗者も共に一體化する所に、エネルギー作用の特性がある。それ故に、優勝劣敗の法則は、見方によれば決して無慈悲なものではなく、寧ろそれとは反對に、內部的に腐敗衰頽した民族を救濟淨化する大慈悲とも見られる。

優勝劣敗の結果は、斯くの如く吸收同化に歸するのであるから、團體の單位は次第に大きくなる。小地域に割據した多くの部族が、一つの大きな民族國家に發展したのは、屢々それ等の部族相互間に爭鬪を繰り返した結果であるが、今日地球上の各地域に割據する多くの國家が、互に爭鬪を續けつゝあることも、亦一層大なる單位の團體に發展せんとする努力に外ならぬ。此の來るべき大單位の團體は、今日では協同體等の名稱を以て呼ばれて

ゐるが、要するにそれ等は今日の國家の內容をなす領土の概念を超越せる大地域と大人口とを包含する大團結を意味する。而して、その大地域といふのは、殖民地の如く世界の各方面に散在する地域ではなくして、一つの大陸の中に隣接せる大地域であり、その大人口といふのも、同一種族の大人口を基調とする。斯くの如き大地域的、大人口的協同體の出現すること、及び將來の世界が斯かる協同體の數個によつて分割せられることは、當に必然的であらう。

大協同體の相互間に於ける世界戰爭の發生も亦必然的であるが、それと共に大協同體は人的にも物的にも容量が大きいのであるから、內部的な分裂解體作用の危險性も多分に持つことゝなる。乃ち、外部的な戰爭と、內部的な紛爭とは、その場合にも今日の國家に於けると同樣であつて、たゞその規模が大きくなるだけであらう。蓋し、戰爭と紛爭とは、斯かる大團體を釀成せしめたエネルギーの必然の作用である。之を原理的に考察すれば、戰爭が勃發するのは、一つの團體と他の一つの團體との間に、甚だしい不均衡が生ずる場合

である。例へば、一つの國家が廣大なる領土と豐富なる天然資源とを領有してゐる時に、他の國家がその人口の大なるに比して、狹小なる領土と貧弱なる資源とを領有してゐるに過ぎない場合である。而して是等の兩國家の戰爭の結果は、吸收同化によつて、斯かる甚だしい不均衡を均衡せしめるのである。團體の內部に於ける紛爭も、亦之と同樣である。一のの氏族、黨派、階級、閥族等と、他のそれ等との間に、甚だしい不均衡が介在する場合に、紛爭が發生するのが常であつて、その結果は戰爭の場合と同樣に、同化吸收によつて、不均衡を均衡せしめるのである。

そこで、玆に起る一つの問題は、斯くの如く戰爭或は紛爭の結果は、不均衡を均衡せしめるものとすれば、人類世界の歷史は、畢竟斯かる戰爭或は紛爭の反覆繼起に外ならぬのであるから、歷史發展の方向とは、斯かる均衡の擴張の傾向ではないか、といふことである。實際、公平とか、正義とかいふ觀念は、此の傾向が各人の精神上に奧深く表現せられたものと言ひ得るであらう。然しながら、此の傾向を、エネルギーの原理より觀察して、果して喜ばしいものと言ひ得るか否かは別問題である。

自然界に於いて、公平均等の爲めの作用が例外なく行はれるのは、熱力學の現象である。高い溫度と低い溫度とが接觸すれば、熱は自然のまゝでは必ず高い方から低い方へ流れる。その結果、兩者の溫度が均等して、熱の移動が止むのである。そこで第二章で詳說したやうに、熱力學の世界にはエントロピーの原理といふものがある。それは循環輪廻の圓環的な原理ではなくして、一度去れば再び還ることのない直線的な原理である。宇宙のエントロピーが次第に增加するといふことは、局所々々によつて溫度を異にする宇宙が、次第にその溫度を均等し、熱現象に於いては公平の爲めの運動が例外なく進行するといふことであるが、それは換言すれば、宇宙のエネルギー價値が次第に下落し、悠久の未來に於いては全宇宙の熱が均等とせんする傾向であつて、寂滅無活動の死の宇宙になりはせぬかと、一部の人々に危懼を懷かせるやうな衰頹現象である。

人類の世界歷史が、公平均等の方向に向ふものとすれば、それは明にエントロピー增加

の現象に類する衰頽現象である。自然界の一切の現象が、ポテンシャルの差によつて生じ、熱の場合には温度の差によつて生ずる如く、社會的な一切の活動は、團體相互間にポテンシャルの差のあること、或はその團體構成員たる人と人との間に地位の差のあることによつて生ずるのである。此の差の無くなることは、熱の場合に温度の差が無くなるのと同樣であつて、一切の活動を停止してしまうのである。斯かる公平均等の社會を、平和幸福の理想鄕とし、或は天國、極樂等の內容と考へる者も隨分多いのであるが、それ等は畢竟、退化寂滅の死の世界を望見してゐる者に外ならぬのである。

人類の歷史を通觀すれば、斯かる傾向の存在すること、特に近世に至つて、斯かる傾向が頗る顯著になつたことは、蔽ふべからざる事實である。多くの人類は之を文化と唱へ、文明と稱して隨喜してゐるが、それは天國を願望し、極樂を渴仰するのと同樣の錯覺である。此の衰頽の傾向は、歷史時代以降の人類世界の自然的傾向であるとも言ひ得るであらう。若しも人類が自然の子たる動物の一種として、此の傾向に盲從するものならば、他の多くの動物よりも先に滅亡して、地上からその姿を沒することは必然であり、近世に至つて此の衰頽滅亡の傾向は驚くべき加速度を以て進展しつゝあるとも言ひ得るであらう。然しながら、人類は、その叡智を以て動物より飛躍し、廣大なる自然エネルギーを利用することに成功したる如く、自ら自然の法則を洞察し、自覺的に衰頽滅亡の道を回避して、有らゆる條件の許すかぎり、その生存發展を繼續し得るであらう。

若し人々が、斯樣な自覺と反省とを以て、歷史の必然を回避することは不可能である、と言ふならば、吾々はその臆斷に過ぎないことを指摘せねばならぬ。實際、人類は自然科學及び技術の世界に於いて、自然界のエントロピー增加の傾向に逆行することに成功したのである。熱は必ず高温度から低温度に移るものであつて、その逆は行はれないといふ自然界の必然に逆行して、低温度から高温度へ熱を移すことに成功したのが、各種の冷凍工業である。その成果は、アムモニヤ瓦斯を液體となし、炭酸瓦斯を個體のドライアイスとなし、更に空氣を液體或は固體となし、進んで水素、ヘリユムの如きものまで液體となす

ことに成功したのである。斯くして自然界の温度差は次第に減少するといふ傾向を回避して、その温度差を増加することに成功したのである。それと同様のことが、精神上、社會上、乃至歴史上の事象に就いても、成功しないとは斷言し得ないのである。

平等一様の道を追ふことは、通俗觀念の文化、文明と一致することであつて、一應は賢明らしく見えるが、その通俗的傾向を超越して、差別と特殊性の道を求むることは、一層賢明なることである。精神上、社會上、乃至歴史上のことに於いて、人類が動物より飛躍する道は、唯此の一點に懸つてゐる。そこに、東洋文明及びその最高結晶たる日本文化の偉大なる眞理が輝いてゐるのである。全世界の人類が、自覺的に斯の眞理に還元することは、眞の意味に於ける世界の再生であり、又光輝ある新世界への發足である。

第二篇　世界新秩序の根本思想

第一章　民主主義の頽廢

『吾々は實に容易ならぬ時代に生きてゐる。今や黎明をつげたる歴史的新時代の驚歎すべき原動力は、全世界史の最も偉大なる時期を劃せんとしてゐる。それはシーザーやナポレオンの時代よりも遙に偉大な、又遙に物凄い時代である。』と、オスワルド、スペングラーは、有名な『決斷の時』の中に述べてゐる。世界は、腐敗せる舊秩序を抛擲して、清新なる新秩序に移行せんとしてゐる。その腐敗せる舊秩序とは、民主政治のことである。今日の民主政治が如何に腐敗してゐるかは、その本場たるアメリカの現狀に就いて、ラルフ、アダムス、クラムの名著『デモクラシーの最後』の中に最も痛烈に指摘せられてゐる。民主政治の缺陥をこれ以上雄辯に説明することは、困難であらうと思はれるから、以下にそ

の數節を抄譯することにしよう。

『近代の民主政治は、社會的にも政治的にも失敗であつた。それは誤まれる哲學に押しつけられ、その任にあらざる人々によつて操縱せられた爲めに、生命そのものゝ本質、及び生物學上、人類學上の事實に對する認識に缺くる所があつたからである。民主政治は、全人類社會を、最後の深淵の斷崖まで持ち運んでしまつた。是は過去五百年間の民主政治の經過の中に明に定つてゐた運命であつたのである。今や此の宿命は事實上に成立した。吾々は來るべき新時代を待ち望み、その爲めに人力の限りを盡して準備せねばならぬ。』

『現代型の民主政治は最近に明白になつた獨斷的な諸信條に基礎を置くものであつて、それ等は何れも最近一世紀半以内に生じたものであり、過去に於いて民主々義實現の大立物達を鼓舞した理想とは、殆ど關係のないものである。現代の民主政治は諸種の原理の上に成立してゐるが、それ等は何れも生物學上、史學上、或は哲學上、證明され得ないものである。その諸原理の中にあつて、特に悲慘なる獨斷は、かの「進化」であつて、これに

よつて人は、その先天的完全性に基いて、「遙か未來の或る天與の事實」の方向に自働的、不可抗力的に推進してゐると想定せられ、その到來を確保し、それを實現する力として、自由主義的、一般普通的の義務教育を課せられたことである。而して是と直接に關聯して、かの一見穩かな、夢想的博愛說、即ち人は總て自由平等に造られてゐる、といふ說が言ひふらされたことである。』

『斯かるお爲めごかしの俗說から必然に導き出されたのは、代議制度と普通選擧に基く議會政治といふ、さも尤もらしい案であつた。而してその基礎要件として、改造社會の劃期的原則、即ち選擧權は、一つの特權ではなくして、人が人としての天賦の權利、讓渡不能の權利であり、生命、自由及び幸福の追及の爲めの爭ふべからざる諸權利と同等の效力のある權利であるといふことが主張せられたのであつた。最後に、或る意味に於いて最も奇怪な、しかも最も權威ある獨斷は、總ての問題に就いて、多數は少數よりも事實上正當なるものと看做され、多數によつて決定されたことは、正であれ、邪であれ、賢であれ、愚で

あれ、一も二もなく應諾し、服從せねばならぬ、といふことであつた。』

『民主國家は、特權の廢止、機會の均等、才能の發揚といふ三つの基礎の上に立つてゐる。此の意味に於いて特權といふのは、金で買つた權力、自然資源或は生產手段の支配、或は何等から功績によらずして、何等かの力によつて獲られた獨占を言ふのである。現在の墮落せる民主社會は、此の種の特權によつて縱橫自在に打ち貫かれてゐる狀態である。社會組織は、金貸し、大事業主、活動寫眞のスター俳優、無道惇德の新聞業者等の貴族政治によつて、壓倒的に支配せられてゐるのである。』

『民主々義は、機會の均等を要求する。これは人が各々天賦の素質として享有せる一定の才能を充分に發達せしめる機會を與へねばならぬ、といふことを意味するのである。人間平等の根本思想が、實際に現れて來るのは、此の點にあるのである。自由な、世間的な、普通義務教育は、各人の素質がどうであるかを認定するのに、最もよい方法であるかも知れない。然し、今日の普通義務教育は、その出發點から問題にならない、有害無益なものである。現在高等學校、豫備學校、工業學校、專門學校へ行く學生の二分の一乃至三分の二は、それ等より確に低い程度、例へば乙種高等學校の程度より以上に發達し得ない素質の者である。彼等をより高等な教育へ誘惑することは、不當であり、寧ろ殘酷である。それと共に、もつとよく出來る學生達にとつても、それは不當、殘酷なことである。年々學校から送り出される卒業生は、何千、何萬を數へるが、彼等は、其の天性に適する仕事をする素質を損はれてゐる。彼等は一定の型から押し出されて、眞の才能を奪はれ、安い給料で均等な仕事に就業させられる。若しそれが嫌なら、白色カラーの失業者の群に投ずる外はない。これは、機會均等觀念の破產である。』

『才能の發揚といふことは、これと密接に關聯してゐる。民主々義は、各人がその資性と後天的教養とに適する生活境を發見し、それ等を社會公共の爲め、又更に大なる綜合體たる種族の爲めに、最も有效に使用せられるものでなければならない。これやがて各人が自己實現と自己充足とによつて、「獨立宣言」の中に人權の一種として誓約せられた幸福の追

及に參加する所以である。然るに、變形頽廢したる民主々義に於いては、此の切なる要求を滿足することが、次第に不可能になつて來る。現代の民主政治下にあつては、人の傭聘は、接吻と同樣に、愛憎によつて行はれる。有力な政治家は發言の機會を得る爲めに、政黨員になるか、でなければ、金持ちや大事業家に自身を時間貸しなければならない。ハリウッドは、俳優、作者、畫家等に對して、彼等が地位、名聲、資產を得る爲めに、彼等の魂を賣るやうに誘惑する。ハースト化した新聞紙は、文筆の業に携らんとする人々の學藝上、道德上の標準を極度に低下する。ラヂオの放送は、有らゆる創造的本能を害する大きな毒手を延べる。宗敎は、興太宣傳廣告となり、哲學は、世人の欲する所に迎合する世俗敎になつてしまつた。是は、如何なる合理的意義に於いても、民主々義といふものではない。』

『斯くして、民主々義は、人間の生命、自由及び幸福の達成を確保することに、失敗したといふことは、自ら明である。』

「中古期の人々の生活は、困難な、不愉快な、偏狹な、局限されたものであり、その生活程度は、今日の熟練工の生活に比して、遙に低いものであつた。然しながら、西紀千百年から千五百年までの中世期間に、十八世紀のフランスの農夫、十九世紀初頭の英國の紡績工、或は二十世紀のペンシルバニアの炭坑夫、合衆國南部地方の農場人足等のやうな、甚だしい不面目と、經濟上の奴隷生活とに甘んじた者があつたかどうか、疑問である。中世期の農夫や職人の生活は、酷烈で、制限せられてゐたと言はれるかも知れないが、それを償ふだけの良い點があつたのである。丁度アメリカに於いては、新產業主義、企業合同、新民主々義の導入せられるまでが、さうであつた。當時の人間は、比較的自由であり、その地位は安全であり、又相應な資財を持つてゐたから、自らの品位を損することなく、自尊心を持つことが出來、今日の都會賃銀勞働者の如く、搾取せられることもなかつた。今日の都會勞働者は、土地の所有者でないと同樣、最早彼等自身の頭腦や手足の所有者ではない。彼等は、獨占資本の原料として取扱はれ、政治家、宣傳者、僞豫言者、新聞紙、ラ

ヂオ、活動寫眞等によつて敎へ込まれる馬鹿々々しい信條や、生かじりの意地惡敎育を受けた學者等の僞哲學によつて、打ちのめされてゐるのである。』

『過去五百年間の實際的奴隷生活の爲めに、大多數の人々は、農夫も、小地主も、工業家も、商人も、職人も、新しい世態に强制せられて、新しい性格を造り出して來た。彼等は、吝嗇で、狡猾で、我儘で、嫉妬深く、他人を羨み、貪欲で、彼等の服從する少數の物持ちに對して、愚鈍な憤怒を懷くやうになつた。斯かる性格を持たされた彼等が、此の腐敗せる社會の醸成以外に、何を爲すことが出來やうか。正義の感じは人間に絶對的なものであるが、彼等にとつては、正義といふものは全然なくなつたのである。』

此の悲慘なる末期的狀態については、再びオスワルド、スペングラーの言說を引用することが、適切であらう。彼は言つた。

『吾々が今日「秩序」と認め、自由主義的制度と稱するものは、無政府狀態が習慣性になつてしまつたものに外ならぬ。吾々は之を民主々義と呼び、議會中心主義と呼び、國民自治政府と呼んでゐるが、その實は責任自覺的な權威、即ち眞の政府が存在しないこと、換言すれば、眞の國家が存在しないことに外ならぬのである。』

『今や彼等は有らゆる會議に於いて、狂へる如き激情に攪亂せられ、情熱に煽動せられ、最早支配者に服從せざるのみならず、それと同等の地位に立つことすら肯んぜず、自らの手中にその最高權威を奪はんとしてゐるのである。一度かゝる事態を生ずれば、國家はその名稱に於いては、自由と民主といふ、最も體裁のよい外觀を呈してゐるが、その本質は最惡の事態、即ち暴民政治に轉落してゐるのである。今や彼等は協力して、虐殺、放逐、掠奪を恣にし、再び完全なる野蠻狀態に墮落し、專制君主の再來を迎へねばならぬ事態にたち至つたのである。』

第二章　獨裁主義の擡頭

かくして、民主々義は、何時か暴露せねばならない正體を、遂に暴露したのである。民

衆による民衆の政治といふものが、單なる彌次馬政治に墮すること、而してそれは本來習慣的な無政府狀態であつて、人間の本性に反し、人間の一切を幸福を奪ひ、その發展に逆行するものである、といふことが、明になつたのである。此の悲慘なる末期的狀態を救濟し、人類をその本性にたち歸らしめんとする努力の、歐洲に於いて實現せられたものが、獨裁主義である。

歐洲の獨裁主義は、イタリアのファツシズム、ドイツのナチイズム及びロシヤのボルセビズムとして、列擧せられる。是等の三主義は、その內容に於いて非常な相違があるが、共に獨裁主義なることに於いて、相通ずる所がある。現代の世界に、何故に獨裁主義の如きものが出現したのであるか。是は東洋人よりも西洋人にとつて、頗る不可解な問題である。彼等の歷史哲學は、例へばヘーゲルの歷史哲學によつて代表せられてゐる如く、歷史の發展は、自由の發展であるといふのが根本思想である。然るに、自由主義の次に獨裁主義が擡頭したといふのは、何事であるか。歐洲の文明國民が、何故にかゝる獨裁政治に滿

足してゐるのであるか。何故に、自由主義を棄てゝ、獨裁主義に走つたのであるか。多數の歐米人にとつては、全く不可解なことである。從つて、歐米諸國の政治家、學者等から、獨裁主義に對する批判は數限りなく出てゐる。その中には、全く見當外れのものもあるが、又幾分か眞相を摑んでゐるものもある。以下に、それ等の批評中から、若干のものを抄譯紹介することにしよう。

ボルセビズムは、その根底たるマルクス主義、共產主義から批判せねばならぬが、それは餘りに長くなつて別稿に讓ることを適當と考へるから、單に獨裁主義としてのボルセビズムのみに就ての批判を採錄する。而して、實際上必要なのは、此の部面なのである。ロシヤ革命史家の通說の如く、ロシア革命の成功したのは、マルクス主義の理論や、共產主義の理想によるのではない。過激派即ちボルセビキの獨裁的組織と、その團結力、戰鬪力によるのである。當時他の諸黨派は、何れも散漫なる組織と、抽象的なイデオロギーとを持つに過ぎなかつたに反し、レーニンの率ゐるボルセビキは專制獨裁型の統制と、强固な

る團結力とを持つてゐた。その統制力と團結力とが、あの混亂せるロシアの崩壞期にあつて、よく覇權を握ることを得せしめたのである。從つて、ボルセビキ傳統のロシアが、今日に至るまで獨裁制を以て終始するのは、寧ろ當然である。歴史上重大なのは、此の實行力の觀察である。ボルセビズムは階級鬪爭と、プロレタリアの獨裁とを、その實行上の信條とするものである。マルクス主義の本領も、亦此の實行上の信條に存することは、多くの批評家が屢々指摘した所であつて、ボルセビズムに對する批判も、亦多く此の點に向けられてゐる。以下はその代表的な二、三である。

『ソビエット制度の一原理は、人民全體によつて政治を行ふのでなくして、或る一つの階級によつて政治を行ふことである。是は、民主的政治原理の正反對のものである。何故に、かゝる觀念が實現したのであるか。その答をなすには、先づ現在國家を支配しつゝある階級が、ツアーの政治下に如何なる狀態に置かれてゐたかを回顧しなければならぬ。當時のロシアの農民にとつては、如何なる主義思想のものであらうと、彼等の生活を良くし

てくれるものでありさへすれば、それでよかつたのである。ツアーの政治は、勞働者の絶對支配によつて取替へられたが、その勞働者は全人口中の極めて少數の都市勞働者の團體であつた。彼等が一度天下を取るや、從前の支配階級に對する復讐の念が、先づ赤色テロとなつて實現した。商業に携る者、或は他人の勞働に基く收入を持つ者は、政治に關與する資格なきものと認められた。中產階級は、ブルジョアジーと呼ばれて特別な排斥の目的物となつた。然しながら、本來かゝる階級政治といふものが、果たして正當なものであらうか。近世國家に於いて、全國民中の或る階級だけが、特に政治に關與することから排斥せらるべきものであらうか。』

『プロレタリアの獨裁と稱せられるものは、將來の世界に期待せられるやうな性質のものではない。實は、世界は過去一世紀程の間、社會的にも、政治的にも、經濟的にも、プロレタリアの獨裁が縱橫自在に實現し、その橫行に惱みぬいたのである。腐敗せる民主々義の愚衆政治、暴民政治、是れである。その窮極は無政府狀態であつて、それを救ふ爲めに

現れた獨裁主義の一種が、ボルセビズムであつて、それは、プロレタリアの獨裁ではなくして、一指導者の獨裁、その貴族政治に外ならぬのである。』

『ソビエット制度に於いては、工場、鑛山、農場に於ける勞働は、强別徵兵の制度に似たものである。各人は働くことを强要せられ、職業の種類及び場所について選擇をなすことは、嚴に制限せられてゐる。勞働組合の如きものは、政府の嚴重なる統制下にあり、ストライキや勞働運動を行ふ者は、嚴罰に處せられる。政府は國民に戰爭——全世界の資本主義國家と經濟的戰爭に從事してゐると鼓吹する。その階級戰爭の觀念が、ロシア產業の精神的原動力になつてゐるのである。』

『ソビエト制度に於いては、今日の立憲國家の國民が享有してゐるやうな人權や自由が存在する餘地のないことは、明である。政府の役人や宣傳者は、現在の獨裁制は過度的のもので、大衆に政治の能力が無いから、止むを得ず行ふのであるが、やがて大衆自らの統制による完全な共產主義が行はれる、と稱してゐるが、ソビエット聯邦の基本たる經濟上の唯一理想主義、思想上の唯一信條主義が、多衆政治によつて行はれ得ないことは明であつて、多衆政治の行はれるときは、共產主義の崩壞するときであり、それ迄は獨裁制は必然のものである。かくして、國家は全部であり、獨裁者は絕對の支配者であり、個人は權利も自由もないものである。』

次に、ファシズムについては、次のやうな批判が行はれてゐる。

『イタリーは現在組合的國家と稱せられる。全國の各種の職業、產業は、總て組合に組織せられ、それを通じて政治が行はれるのである。國王は、制度上は尙ほ國家の元首であるが、その權力は甚だしく制限せられ、ムツソリニ首相は內閣の多くの主要な地位の兼務者として、實際の統治者である。かくして、政治上の實際の權力を掌握する者は、唯一人であつて、その專制なることに於いて現在ソ聯で實行せられてゐるものより一層徹底せる觀がある。何故に、かゝる政治上の激變が、イタリーで起つたのであるか。その解答として、一部の理由はイタリーの非常な貧困、及びその周圍の國々の背景に求めねばならな

い。又他の一部の理由は、イタリーに於ける社會主義運動の增長、それが經濟組織を危殆に陷れんとしたことに求めねばならない。』

『シアシズムは戰爭の用意を意味する。平和は嫌忌せられる。戰爭は人間の最高の天性を發揮せしめるに必要なものであると考へられる。戰爭は犧牲行爲を含む。戰爭は崇高なるものである。平和はフアシズム精神の敵である。フアシズムはその隣國を鷹の樣な眼を以て睨んでゐる。フアシズムは世界平和の觀念を蹂躙する。武力征服による領土擴張は、その根本政策である。ジユリアス、シーザーとナポレオンとは、その標本的な英雄である。かくの如き態度が、果たして正當なものであらうか。フアシズムの教理には缺陷がないであらうか。それは受容せらるべきものであらうか。誠に重大な問題である。』

『フアシズムは、神聖崇拜と英雄主義とを信條とする。それは人間の行爲が、直接であれ、間接であれ、經濟的動機によつて左右されないことを意味するのである。「共產主義下に於いては、人間は單なる人形である。フアシズムの下にあつては、人間は決して人形ではない」とフアシズムは斷言する。此の理由によつて、階級鬪爭の觀念は總て拒絕せられる。フアシズムによれば、「單に身體上の安寧を貪ることは、人間を動物の水準に低下せしめる。人間は、國家に御奉公する場合に於ける如く、生死の境に立つ時にのみ、生命はその最高價値に到達するのである。」國家は全部である。個人は無なるものである。』

『イタリー人は、多數者による政治の權利を放棄してしまつた。彼等は政治問題を考究する權利を棄てたのである。多數者に責任を求めずして、唯一人が一切の政治問題をその手中に握つてゐるのである。その一人、即ち獨裁者は全國民の爲めに考へる。然し、吾々は反問せざるを得ない、その一人の精神は、國民の集團的精神或は議會の集團的精神と同樣に、誤りを犯すものではなからうか。獨裁者がその地位を維持する爲めには、常に正當でなければならない、少くとも、國民からは正當と見られねばならない。獨裁者が重大な過失を犯すことは、その顚落を意味する。獨裁者は、その後繼者を養成することが甚だ困難である。獨裁者が死亡し、或は讓位した場合には、有能な後繼者が無い爲めに、屢々混亂

が起るであらう。ムッソリニ首相が舞臺を去つた後のイタリーの運命はどうなるであらうか。戰後のあの暗黑時代が再び來るのではなからうか。獨裁者に權力を委ねることは、白紙の委任狀を渡すのと同樣で、それを持つ者が思ふ通りに行使するのである。イタリーのファッシズムとドイツのナチイズムとは、反民主々義國家に於ける大衆的思考力の頽廢の好個の實例である。』

次に、ドイツのナチイズムについては、次の樣な批判が行はれてゐる。

『ドイツが前回の世界大戰に、その敗戰を承認し、屈辱的媾和條件を受諾したときに、ヒトラー運動の發生する素地が既に出來てゐたのである。良かれ、惡かれ、ドイツはその受諾させられたよりも遙に好條件の媾和を期待してゐた。巨大なる賠償金その他の重荷は、全國民の不滿と、戰勝國に對する復讐の念とを釀成せずには置かなかつた。ナチスは、此の不滿と復讐心とを煽つて、愈々盛んならしめた。インフレーションの期間中に、その資產を失つた農家や中小商工業者は、期せずしてナチスの追隨者になつたのである。』

『ドイツのナチ運動は、主として、戰勝國に對する復讐と、ドイツ國民の繁榮といふことに、その精神的基礎を置くものである。戰敗によつて、その氣性が甚だしく尖銳になつた國民のみが、ナチイズムをその額面價格通りに受け得るのである。』

『世界の各地には、ユダヤ人に對する反感が濃厚であるが、現代世界に於いて、ユダヤ人迫害を公の政策にしてゐる國家は、ドイツが最初である。ユダヤ人が一掃せられた後には、又同樣の政策が樹立せられて、他にも迫害を受けるものが起るのではあるまいか。宗教上、人種上の偏見が正當視せられ、或は擁護せられるといふことは、信じ難いことである。民族全體が、その中の少數者のしたことによつて判斷せらるべきものであらうか。ナチスは、その祖國に、民族尊嚴の對立的原則を確立した。民族の純粹性は、彼等の理想である。アリアン人種は、ドイツ民族の絕對的要素と考へられてゐる。如何なる人物と雖もその本人のみならず、數代の祖先まで、純粹のアリアン人種でないものは、ドイツ市民の

典型とは考へられない。人物自身の性格や行爲よりも、その系統祖先が重要視せられるのである。』

『ナチス治下にあつて、教育は全く一變してしまつた。小學校の一年生から、生徒はドイツの偉大さを極めて誇張した方法で教へ込まれる。總統を神の如く尊敬する態度が奬勵せられる。他の諸國民の功績に歸するやうな事柄は、教材中から取り除かれるか、又は極めて輕く取扱はれる。宣傳が、教課の主要素になつて來た。斯かる教材を教へることを拒絶した教員や大學教授は、放逐せられた。ユダヤ系の第一流學者で國外に放逐せられた者は多數であつた。斯かる教育の理想が、他の諸國の教育の理想と協調し得るものであらうか。斯かる教育制度によつて、現代世界に善良なる市民を送り出し得るであらうか。』

獨裁主義全體についての概觀も諸方面で行はれてゐるが、その中には次のやうなものが見受けられる。

『ボルセビズムとフアシズムとは、歐州及びその邊境に於いて試みられた二つの政治上の新案であるが、根本的な退歩の二つの標本である。それ等は共に長い記憶と、歴史的良心とを缺いた平凡な、間に合せの人物によつて指導せられた典型的の大衆進動であつて、その出發點から既に過去の時代に屬する人々の如く行動して來た。現代に起つた事柄ではあるが、その本質は、過去の時代の群像に過ぎないのである。』

『爛熟し、腐敗した民主々義を、立て直さうとする企ては、さも尤もらしいことであつた。然し、それは何等效果のない惡事であつた。フアシズム、ボルセビズム、ナチイズムは、それに替るものとして出現した。然し、あらゆる點に於いて、その現狀は、最初の期待よりも日々惡くなつて來たかに見える。勿論かゝる事は、想像することすら躊躇せしめるのであるが、事實は致し方がない。元通りに、アメリカ式或は歐洲式の議會制度に戻るべきであるか。それは出來ない。何となれば、吾々は既にその本質を見透し、その結果が如何なるものであり、何故にさうなるかを承知してしまつたから。方向を轉じて、國家社會主義或は全體主義國家に向つて行くといふことも、吾々には出來ない。それ等に替るべ

き何物かを發見するといふことは、吾々にとつての焦眉の急務である。吾々は刮目して、その何物をか捕へやうとしてゐるのである。』云々。

第三章　西洋的秩序の窮境

ファシズム、ナチイズム、ボルセビズム等の獨裁主義は、腐敗せる民主政治に對する反動及び救濟として生じたことは明である。即ち、民主政治の窮極は、彌次馬政治或は無政府狀態に墮するものであつて、その彌次馬政治に對する統一獨裁力の反動、その無政府狀態の組織的救濟が、獨裁政治の本領であり、非常な貧困、混亂の狀態にある國家に於いて、必然に發生するものである。然しながら、最近までの狀況に於いては、歐洲諸國の獨裁政治は單に反動たる狀態を脫せざるものであつて、前節に列擧した諸批判中に言はれてゐる如く、多くの缺點を藏してゐる。アダムス、クラムが巧に指摘した如く、吾々は、民主主政治と獨裁政治との關係を、次の如く表示される歷史的の循環性によつて、理解すること

が出來るのである。

民主——墮落——無政府——獨裁——奴隷——革命——民主——

即ち此の循環は、民主によつて始まり、民主によつて終る一つの圓をなしてゐるやうであるが、よく考へると、それは圓ではなくして、螺線である。その螺線は下向きに進行して居つて、一循環毎に次第に下の方へ進み、歷史が進行するに從つて、次第に墮落の程度が甚だしくなることを意味する。

此の歷史の螺線の循環性は、右の如く、民主々義に始まつて、民主々義に終るものであるが、是ば西洋歷史の根本特性であると斷ずることが出來る。西洋歷史の黎明はヘレニズム、即ちギリシア主義にあり、而してギリシア主義は、民主々義の源泉であつたのである。進歩は同時に退歩を意味する。前者を原動とすれば、後者は反動である。而して、原動があれば、反動があるといふことは、物理上の眞理であるのみならず、又歷史上の眞理である。西洋の近世史は、五百年前に起つたルネツサンスに始まる。ルネツサンスは、ギ

リシア主義の復活、即ちギリシア文化へ復古したことを意味するのである。その後西洋の近世史上に實現せられた大進歩は、言はゞ此のギリシア文化への大退歩があつた爲めに、その反動として實現せられたのである。而して、その大進歩は、政治上、經濟上、科學上、哲學上に大改革、大發展を成就して、十九世紀の後半に、その絶頂に達し、二十世紀に入つてからは、急速度に腐敗、頽廢し始めたのである。此の腐敗、頽廢は、民主々義の失敗として、認識せられるのであるが、それは、畢竟その本源たるギリシア主義の失敗に歸せらるべきものである。今や西洋諸國は、此の頽廢の時代を飛躍して、更生の進歩の階段に入らねばならないのであるが、更に進歩する爲めには、前述の如く、更に退歩しなければならない。然らば、西洋史は再びギリシア主義へ復古すべきであるか。斷じてさうではない。何となれば、斯かる短距離の復古は、既に歴史上の過去に屬し、未來の一層長足なる發展の爲めに、何等爲す所なきものであるからである。玆に於いて、將來の一層長足なる進歩の爲めには、一層長足なる退歩、即ち東洋の遠古文化に復古することを必要とし、將來の人類の歴史は、東洋文化に復古することによつてのみ、實現せらるべきことが、明瞭になつて來る。

歐洲諸國に於ける、各種型式の獨裁主義は、實は、東洋文化復古の最初の象徴である。それは、ギリシア主義に始つた西洋の民主的秩序の行き詰まりと、その打解の方向とを指示するものである。ギリシア主義を超えることの出來ない西洋思想、特にその歴史哲學の如きものを以て、此の現象を理解し得べからざる理由は、そこに存するのである。それは西洋的秩序の窮境、西洋史の螺線循環性がそのドン底に行き詰まつたことを意味するものであるから、西洋思想を以て了解することに行き詰まつてしまうのである。然しながら、最近までの獨裁主義は、尚ほ腐敗せる民主政治に對する反動の域を脱せず、多くの過去の腐敗の遺物をそのまゝ含有し、尚ほ西洋史の循環性のドン底にあつて、將來の偉大なる人類史の發展の爲めに、大なる飛躍の前途を持つかに見える。是れ、多くの批評者が獨裁政治に失望し、之を非難する所以でもあるのである。

獨裁政治が、過去の腐敗物を多數に傳來せること、中にはその腐敗の度の一層甚だしきものを醸成しつゝある事例は、多々見受けられるのであるが、その顯著なる一例は、ボルセビズムの奉ずる唯物思想である。唯物思想は、頽廢民主々義の嫡出子である。末期民主々義は、黄金萬能の唯物思想の上に立つものであるが、それを一層酸敗せしめたものが、社會主義的唯物思想である。それは腐敗民主々義の延長に過ぎざるものであつて、人類史の淨化及び將來の發展と逆方向のものである。今日の世界の窮境打解の根本問題は、そのやうな物質世界のみにあるのではなくして、寧ろ人間精神の根底に繫つてゐるのである。それに就いて、アダムス、クラムは次の如く熱烈に論じてゐる。

『人間精神の新なる解放、精神的自由の眞の復活がなければ、社會改造、政治改革に關する一切の技術的考案は、何等の效果なきものである。』

『過去三百年間の盲動とその結果の集積の爲めに、人間は貪るが如く肉體上及び精神上の自由を求め、その結果は却つて肉體、精神共にその本性を喪つてしまつた。之を喪つてからは、肉體上の安逸と、金錢價値との爲めに、餘りに高價なる費用を拂ひ過ぎたのである。精神上の自由を失つた人間は、極めて低級な、物質的にのみ成功した、俗衆のお爲めごかし、胡魔化しの奴隷となり、價値の基準を顚倒し、時が經つと共に、墮落行爲に馴染んでしまうのみならず、自身がごまかしの奴隷になつてゐるといふことすら、氣付かなくなつてしまつたのである。』

『將來の世界の爲めに、社會組織或は政治機構の根本的改善を期待するといふことが、果たして正しいであらうか。私はその問に對して、然り、と答へたい。然しそれは、人間が精神上の自由を取戻した場合にのみ限られるのである。それさへ出來れば、何事でも出來るのであるが、若しそれが出來なければ、何等の改善も期待することは出來ないのである。』

そこで、問題は更に進んで、「人間精神とは如何なるものであるか」「精神上の自由とは如何なることであるか」といふ疑問が生じて來る。問題の要點は、實に此の點に懸つてゐ

るのである。精神上の事柄は、主觀的のことであつて、客觀的の普遍性を以て說明することが、甚だ困難である。然しながら、主觀的觀念は、一般に客觀的事實に對應するものである。精神は生活上の事實になつて現れるから、實際上の意義があるのである。人間精神は、人間世界の現實となつて具現せられるから、歷史上の意義を生ずるのである。從つて吾々は、その具體的の事實から、それに對應する精神が斯々のものであると、或る普遍性を以て說明することが出來る譯である。吾々が「人間精神」と稱するものは、人間の自然的な生活に對應する心理である。それは換言すれば、人類の生物學上、人類學上の眞實を反映するものである。更に換言すれば、人間精神が、具體的に實現せられたものが、人間世界の自然なる秩序である。從つて、人間精神といふ主觀的觀念は、「自然秩序」といふ客觀的事實に對應せしめることが出來る。その自然秩序が如何なるものであるかを攻究することが、實に問題の主要點をなすのである。

自然秩序が如何なるものであるかは、第三篇の「世界秩序の基礎理論」中にその綱要を

述べるから、玆に詳述することを省くが、特に讀者の注意を喚起したいと思ふ要點は、第一にその研究の方法論に於いて、人類の社會現象の研究には、機械的、物理的方法、換言すれば、現前の事實に即する解析的方法のみでは、甚だしく不充分であつて、必ず其の時間上の經過、即ち歷史を考慮に入れ、且つ集團を全體として取扱ふ方法、即ち集團の要件たる結合法を基礎觀念とする群論的取扱が必要であるといふこと、而してその第二に、人類の社會現象の根本原則として、家族、民族、種族等の立體的諸群は、組合、黨派、階級等の平面的諸群に優先し、之を同化吸收するといふこと、その反對の事態が生ずるのは、人類が時間性、歷史性を失つて退化衰亡する現象であるといふことである。

斯くの如き考察點に立てば、近世の唯物論が、全く頽廢民主々義の嫡出子に過ぎないことが、明になつて來る。近世の唯物論は、その方法に於いて、物理的、分析的方法を一步も出ることが出來ないものであつて、それは、生物界の高度の存在、自然諸要素の高階なる結合の產物たる人類の特性を放棄して、無生物の低階なる物理的存在に轉落せしめるも

のである。而して、その結論に於いて、階級意識、階級闘爭が、民族意識、民族闘爭に優先することを說くものであつて、それは全く人類の退化現象の表現である。過去三百年間、正義と良心とを失つた世界に奴隷生活を續け、それに應じて低級偏曲なる精神を生じ、價値の標準を顚倒し、自らの奴隷的精神の自覺すら失つた人間の、頽廢せる思考の產物の一つが、近世の唯物論であつたのである。從つてその論斷が、根本的に價値の基準を顚倒し、生物學的、人類學的眞實に反することは、當然である。

從つて吾々は、同じ獨裁主義と言ひながらも、ボルセビズムと、ファシズム或はナチイズムとの間に、根本的な相違の存することは看取せねばならぬ。前者は、近世唯物論の基礎の上に立ち、階級政治を强調する退化思想の域內を彷徨するものであるが、後者は、民族精神を高唱し、民族の尊嚴を擁護せんとする精神主義の上に立つものである。人類の頽廢時代を超躍し、淸新なる更生の歷史を創造する原動力の萠芽は、後者の中に於てのみ認められるのである。「人間精神」とは、旣述の如く、人類全體の爲めの精神であつて、それは必ず家族精神、民族精神、種族精神の擴張として、それ等の中からのみ導き出されるものであつて、決して、個人主義や世界主義の中から導き出されるものではない。安價な個人的博愛主義や自由平等思想の如きものは、決して眞の人間精神に到達することが出來ないものである。

世界が、その頽廢の窮境を脫して、更生の發展を遂げる爲めには、西洋主義より東洋主義に移行せねばならぬ。それは不自然な人工的秩序より、天然自然の秩序に移行することゝ同意義である。西洋的秩序は、その出發點から不自然であり、人工的であつたが、今やそれがドン底に行き詰まつたのである。之を打開する道は、自然的秩序に歸ること、即ち東洋的秩序に移行することの外にないのである。

東洋は人類の祖國である。人間精神は、即ち東洋精神である。人間が人間精神を喪つたといふことは、人間が自然に逆行し、生物學的、人類學的眞理を蹂躙したといふことを意味するのであるが、之を救濟する唯一の途は「自然に歸れ」といふこと、それは「東洋に

歸れ」といふことゝ同意義である。

第四章　東洋的秩序の必然

自然秩序は、差別と特異性の原則の上に、成立する。自然は、性質相異り、力量相異り、智能相異る多數の人々を產出し、彼等が互に自己の持てるもの、他人の持たざるものを、他人に與へ、自己の持たざるもの、他人の持てるものを、他人より受け、互に協和結合し得る如く、按配したのである。若し、總て人々が、同性質、同能力であり、同じものを持ち、同じものを要求するならば、如何にして協和結合が可能であらうか。かくして、自然秩序は、たゞ特異性、差別の原則の上にのみ成立するのである。而して、此の原則は、やがて東洋的秩序の原則であつて、西洋的秩序が、平等の原則の上に立つてゐるのと、正に反對である。

筆者は嘗て、「東亞新秩序の根本原理」と題する小篇に、此の事を力說し、同等性と特

異性との兩原則を比較し、特異性原則の極めて重大なる所以を述べたのであるが、西洋人の中からも、さういふ思想を持つ人を見出すのは、珍しいことである。アダムス、クラムは「デモクラシーの最後」の中に、次の如く述べてゐる。

『人類の書にある第一法則は、不平等である。各個人は、各種の仕事をなす上に、智能も性質も力量も、相異つてゐる。而して其の相異の程度は、善かれ、惡かれ、彼等の肉體上の特性に於ける相異よりも、遙に大なるものである。』

機會均等、自由平等何から何まで平等を原則とするアメリカ市民中から、此のやうなことを述べる學者の出たことは、デモクラシーが如何に行詰まつてゐるかを物語るものである。人類がかく不平等であるから、人類世界の第一原則は、不平等でなければならぬのである。現代世界の廣大なる悲劇は、人類がその反對の誤まれる平等の原則を、彼等の世界の基礎であると錯覺してゐることに基因する。

過去數百年間の歷史に於いて、人類の犯した最大の誤謬は、彼等の國家社會の成構上

に、天然自然の不平等の原則を無視して、不自然なる平等の原則を採用したことであつた。而して、此の根本的に誤まれる觀念が、デモクラシーと稱せられたのである。而して、西洋史に關する限りに於いては、是は實にギリシア文化以來、數千年間の誤謬である。今や、此の民主々義、自由主義の根本的誤謬は、根本的に矯正せられねばならない。此の歷史上の大轉換は、確にスペングラーの言ふ如く、シーザーの時代、ナポレオンの時代よりも、遙に以上の大轉換に相違ない。歐洲の獨裁主義は、その萠芽として、史上に實現したのであるが、既述の如く、その現狀に於いては過去の誤まれる遺物を多大に、且つ深刻に帶同するが故に、單なる反動としか見受けられない。自然秩序の回復、特異性の原則による東洋的秩序の復活までには、尙ほ多くの時を要するであらう。然しながら、一度西洋文化の根本的缺陷に目覺め、平等の原理に疑を持ち始めた彼等の先覺者の間からは、既に東洋的秩序に對する明白なる渴望が表明せられてゐる。「獨裁主義の次に來るべきものは何であるか」といふ疑問に對する彼等識者の解答がそれである。それ等の中で吾々が特に興味深く感ずるのは「自然的貴族制」に對する要望である。以下その代表的なものを二、三抄譯することにしよう。

エドマンド、バークは言ふ。『眞の自然的貴族制は、國家中に特別な階級を構成するものでもなければ、國家から引離し得べきものでもない。それは正當に構成せられた大なる團體の不可缺の要素である。自然的貴族制は、身體に對する魂の如きものであつて、それ無くして人間は存在することが出來ないのである。』

『大衆が、大自然のあの訓練に從つて共同動作をなすときに、國民といふものが認められる。然し、此の調和を破り、此の美しき秩序に背き、自然と眞理との此の順列を破り、大衆をその正當なる主君より離れしめ、之を反抗軍に編入する場合には、かゝる脫走者、放浪者の烏合の衆には、最早國民と呼ばれる尊敬すべき目的物を認めることは出來ないのである。かゝる狀態にある人々は、全く野獸と同樣に、恐ろしいものである。彼等の精神には、服從心といふものが微塵もないのである。彼等は、その世評通り、單なる謀反人で

ある。』

ブルーム卿は曰ふ、『社會の相異る各員が同等ならんとし、或は同等の狀態に接近せんとすることは、全く野性的、且つ狂氣じみたことである。各人の精神上の自然的な性向の相違、各人の才能と性格の特異性、それ等によつて各人が各々異なる行爲をなし、その祖先が各々異なる業蹟を遺したといふことが、自然貴族制の基礎になるのである。それは、立法技術的に企劃せられたる何如なる制度よりも遙に根深く、遙に普遍的なものである。何となれば、如何なる法律的規定も、人の天性に從つて創造せられたその特異性を、無視することは出來ないからである。』

斯くの如き意見の成立には先づ、「自然貴族」とは如何なるものであるか、その性質資格を詳にする必要がある。それに就いては、次の如き說が見受けられる。

『玆に貴族といふのは、人の集團生活に於いて、獨自でよく一切を看破する人、現在の狀態を、その根底に於いて了解し、現實の奧底にある未來の種子を、よく見拔くことの出來

る人である。』

『自然貴族は、他人に任命せられたものでもなければ、選擧せられたものでもなく、委任せられたものでもない。彼は自らがその貴族であることを知つてゐる。何となれば、彼は內部の聲、即ち神命によつて、自身がその高い、苦勞な任務に召し出されてゐることを知つてゐるからである。貴族は絕對に神命に從ひ、何等の辯明、遁辭を用ゐることが出來ない、彼は彼自身の奴隷である。貴族は彼の任務の爲めに必要なこと以外、私的なことは何物も要求しない。貴族の唯一の特權は、他の一切の市民よりも、多くの任務を持つことである。その任務たるや、彼が免れることの出來ないものである。何となれば、彼は彼自身の警官であり、判事であり、又檢事であるから。』

『彼は名聲を期待してはならぬ。彼は名聲を得ることもあらう。或は得ないこともあらう。立派な奉仕と、名聲との間には、本來何の關係もないのである。從つて、彼は、不評判を招くこと、或は國民の憤怒を買ふことすら、毫も恐れてはならない。彼は奉仕する。

而して、それが彼のなすべき總てゞある。彼は任務の內外を問はず、その任務の爲めに吾みなく全身命を捧げる。然し彼は、失敗に對する懸念の爲めに、その魂を勞することはない。彼が骨を埋めるその土の上で、同じ太陽が、後代の收穫をみのらすであらう。』

以上の如き言說は、西洋人の思想の範圍內に於ける最も高い程度に於いて、自然秩序の中心點に對する要望を示してゐるのである。勿論、その中には、西洋思想の臭味と、多くの曖昧な概念とを藏してゐるが、吾々日本人が之を聞くと、彼等は實に窮極に於いて、日本の皇道を渴望してゐるのであるといふことが、容易に察せられるのである。

彼等は「貴族制」に就いて考へ、それに就いて云々してゐるのであるが、その考へは先づ、「王國」に替へねばならぬ。貴族制は一般に寡頭政治を意味するのであるが、寡頭政治は、少數者の政治を肯定するとはいへ、尙ほ複數主義に執着してゐる。その意味に於いて、それは民主々義と共同の觀念の上に立つものである。少數の極致は、唯一單數である如く、貴族制の窮極は王國である。而して王國のみが、人類國家の眞實の自然秩序である。

若しも國家が、一つの國家であり、全國民が一つの組織體に結合すべきものならば、その國家組織體の中心は、唯一つでなければならぬ。複數の中心點を以て、如何にして單數の組織體を構成することが出來るか。一つの組織體には、一つの中心といふことが、自然の根本原則である。而して、此の原則を人間社會に適用したのが、王國である。然つて王國のみが人間の自然な、且つ眞實な國家でなければならぬ。人間の悲しむべき墮落の第一歩は、王國が寡頭政治に轉落したことである。その寡頭政治は、民主々義の第一歩であつたのである。故に人類は、その失へる樂園を回復する爲めには、あらゆる努力を以て、民主々義の根深い中毒を解毒し、王國に復歸することを念とせねばならぬであらう。

世界歷史上に於いて、何故に多數の王國が失敗に歸したか。それは、眞の王國即ち自然王國でなかつたからである。そこで、玆に殘る重要な問題は、「自然王國とは如何なるものであるか」といふことである。自然王國とは、叙上の自然貴族制の極致のやうなもので

ある。而して、自然帝王の性質及び資格は、叙上の自然貴族の最高極致のやうなものである。それは決して、空想や觀念に止まるものではない、實在の自然の帝王である。自然帝王は、他人から任命せられたり、選擧せられたりした御方ではない。御自身も他の一切の人々も、その御方であることを承知してゐる。自然帝王は、その地位を力によつて獲られたものではない。況んや多數投票によつて得られたものではない。之を縮小すれば、丁度一家の家長に當る。自然王國は、丁度人間の自然生活の基礎たる家を擴大したやうなものであつて、自然王國に於ける自然帝王の關係は、家に於ける家長の關係の如きもので、その地位は、先天的秩序たる血統によつて定まるのである。

自然帝王は、その國民の過去を知悉し、その未來を洞察し、之を生長發展せしめることの外、何事も念とせられない。それは恰も、一家の家長がその家族の爲めに、身命の限りを盡すが如くである。名聲を期待することも無く、不評判を氣にすることも更に無い。

このやうな自然帝王は、日本皇國の、天皇に於かせられてのみ、歷史上の事實として實在し給ひ、國民精神の中心と拜せられ給ふのである。實在世界の自然秩序を確立するには、先づその中心を確立せねばならない。而して、その中心はわが　天皇の外にあらせられないことは、甚だ明瞭である。人類の歷史は、二つの方向に墮落した。その一方向は、單一の中心が複數となり、寡頭政治となり、民主政治となつたことである。他の一方向は、自然の中心が、不自然の中心となり、不自然の王國、不自然の獨裁制となつたことである。今や此の二つの根本的誤謬は、明に全世界各方面の先覺者の自覺する所となつた。斯くして、人類世界の自然秩序の極致は、東洋の東端、日本に保有せられてゐるといふことが、明になるのである。

勿論、吾々は、今日の日本の現狀が、自然秩序の標本である、などゝは言へない。されば こそ、國體明徵の叫びが高いのである。況んや、今日の東洋の現狀が、自然秩序の具現であるなどゝは、猶更言へない。されば こそ、東洋新秩序の爲めの血みどろの努力が展開されてゐるのである。然しながら、此の東洋にこそ、遠古の昔に於いて然りし如く、將來

の人類世界の秩序の基礎があり、その東洋の日本にこそ、萬古不易の秩序の中心があるといふことを、日本人も自覺し、全東洋人も意識し、全世界人も認識せねばならぬ時が來たのである。

第三篇　世界秩序の基礎理論

第一章　人類結合の原則

人類世界の現象を科學的に考究するには、科學的態度を以て、その基礎方法を確立せねばならぬ。言ふまでもなく、人類は生物の一種であるから、生物學の一般方法が、その基礎的な研究に役立つ筈である。生物學的方法は、物理學的方法と異る。それは、生物に於いては其の時々の狀態が、その時に相當する變數の消長だけでは決定が出來ない、どういふ經歷を經て其處まで來たかといふこと、即ち其の時に至るまでの歷史が問題になる點にある。物理學的現象は、その經過がどんな道程を經ても、或る時に於ける狀態は、一般にその時の變數の消長によつて決定することが出來る。從つて、物理學的現象は、一般に微

分方程式によつて表現することが出來る。それが物理學の根本的な方法である。然るに、生物學的現象は、以上のやうな理由によつて、簡單に微分方程式に表現することが出來ない。そこで、ドンナン、マイヤー等の諸學者は、生物學的現象は積分方程式、或は群論によつて取扱はねばならぬ、といふことを唱へてゐるのである。勿論、如何なる積分方程式であるか、或は群論の如何なる應用であるかに就いては、現在の處確實な提案がある譯ではない。然しながら、積分方程式或は群論的な方法といふことは、多くの示唆を吾々に與へるものである。

積分方程式といふのは、未知函數の積分を含む方程式のことで、一般にその被積分函數の中に二つの變數が含まれてゐるものである。その一つを生物の或る狀態を表す變數とし、他の一つを時間を表す變數とすると、その積分は生物の或る時期から今規定せんとする時期までの經歷、即ち歷史を示すことゝなる。このやうな歷史を常に考慮するといふ所に、此の方法の重要な示唆がある。又群論といふのは、數、置換、廻轉等の集合に就いて、或る條件が滿足されるときに之を群と稱し、その群の性質を論ずる近世數學の頗る興味ある部分であるが、その根本思想をなすものは、多くの物の集りが如何なる結合法の下に群をなすか、といふことであつて、此の點にこそ、生物學は勿論、社會科學の重要なる論點が藏せられてゐることゝ考へられる。生理學界の權威橋田邦彥博士は、生物學的研究の立場は、微分方程式の全體的取扱を必要とするものであつて、それが即ち群論的のものであると說かれてゐる。而して此の立場は、又社會學的研究にも、同樣に必要な立場である。社會を個人に分折して、個人の性能を究め、その個人の集合としての社會を論ずる解折的方法は、眞に社會を研究する方法ではない。それは恰も、生體を個々の機關に分折し、各機關の性能を究め、その集合としての生體を論じてゐるのと同樣であつて、全一なる生命體としての生體を研究する眞の方法は、決してそのやうなものではない筈である。各機關は、全體によつて制約せられる機關であり、又全體を制約する機關であるから、哲學的用語として、全體が個物を規定し、個物が全體を規定する、といふやうな表現が、哲

學者等によつて使用せられるのであるが、それだけでは、事態の本質は依然として不明瞭である。此の問題の要點は、個物相互が如何なる結合によつて全體を構成するか、といふことに存するのである。例へば、生體の各機關は、外觀上では加法によつて結合されてゐる。然し、それは屍體に於ける結合法である。生體に於いては、加法以外の別種の方法で結合されてゐねばならない。その方法を明にすることが、現在及び將來の生物學の重要な仕事であらう。それと同樣に、社會科學上に於いては、各個の人類が如何なる結合法によつて家族を構成し、民族を構成し、國家を構成し、國際世界を構成し、或は宗派、階級、職業團體等を構成するのであるか、といふことが最も重要な問題である。是等は、いづれも通俗觀念に於いては、人類の群である。勿論、嚴密なる數學的意義に於いて群であるかどうかは別問題であるが、少くとも、人類の各種の集合に於いて、その集合の諸要素が何等かの結合法によつて互に結合し、その結合の結界も亦その集合に屬することに於いて、群の第一條件を滿足するものである。而して、その結合法を闡明することは、社會科

學の最も重要な、又基礎的な任務であると考へられる。

現在の群論は、その深遠なる理論と、一般表現法に就いての華々しい研究とに拘らず、根本的な結合の方法に就いて吾々に與へる智識は甚だ貧弱である。普通知られてゐる結合法は加法、乘法、變位或は置換による結合法等であるが、此の貧弱なる結合法の智識を以てしても、吾々は人類世界に於ける結合の態樣が、決して一樣でないことを、直に看取することが出來る。

最も根本的に、且つ平易に言へば、人類は生むといふ性能と、食ふといふ性能とによつて群を造る。而して生むといふ性能によつて造る群と、食ふといふ性能によつて造る群とは、その結合法を異にするのである。それは、結合の結果から判斷すれば直に判る。吾々はマルサスの人口論を想起すれば、簡單にその手懸りを得るのである。即ち、人口の增加は等比級數的であり、食物の增加は等差級數的であるといふことである。それは換言すれば、生むことによる群は乘法を結合法とするものであり、食ふことによる群は加法を結合

法とするものである、といふことに外ならぬ。乘法を結合法とするから、その結果は等比級數的となり、加法を結合法とするから、その結果は等差級數的となるのである。更に原則的に論ずれば、人類の生むといふ性能は、祖先より子孫に至る歴史的事象であつて、既述の如く、積分方程式を以て論ぜらるべき生物學的現象であるが、食ふといふ性能は、その生活環境との關聯に於ける同化作用或は異化作用として、微分方程式を以て論ぜらるべき物理學的現象である。故に、前者を因子として生ずる群は、時間空間の双方に擴がりを有する立體的群であつて、その結合法は乘法を以て表現せられるものであるが、後者を因子として生ずる群は、單に空間に擴がりを有する平面的群であつて、その結合法は加法を以て表現せらるべきものである。

以上の立體的群或は平面的群とは、具體的に如何なるものであるかと言へば、家族、民族、種族の如きものが、立體的群の例であり、會社、職業團體の如きものが、平面的群の例である。階級、黨派等は、それ等が家族的、民族的であると然らざるとによつて、立體的ともなり平面的ともなるのであるが、現在の個人主義、自由主義等を基調とする階級、黨派等は概ね非民族的であつて、平面的群なることを特色とする。

そこで、立體的群と平面的群との間に如何なる關係があるかといふと、平面的群は立體的群に吸收同化せられるのが本性である。平面は、立體の構成部分であり、立體の各斷面が平面であるから、此の關係は自明であらう。即ち、黨派、階級、職業等の諸群は、家族、民族、種族等の諸群に吸收同化せらるべき性質のものであつて、それが思想感情として表現せられ、黨派意識、階級意識、職業意識等は、家族意識、民族意識、種族意識等に吸收同化せられるのである。そこに、人類の進歩發展があるのである。若し、その逆の事態が生ずれば、人類が立體的存在から平面的存在に退化し、歴史性、時間性を失つて、滅亡することを意味するのである。然るに、平面的思考に慣れて、解析的方法乃至微分方程式を唯一絶對の科學的方法と考へるやうな低級な社會科學に於いては、斯かる錯倒を常態としてゐるのであつて、それは、根本的な方法に大なる誤謬が介在してゐることに

氣付かないのである。凡そ人類が地上に棲息する限り、不變の鐵則は、民族意識、種族意識等は、黨派意識、階級意識等に優先するといふこと、而してその逆の事態が生ずるのは、退化滅亡の現象である、といふことである。

以上は單に生物學的意義に於ける一般結合法であるが、人類はその智性、德性の高度の發展によつて、更に高階なる結合の方法を有する。それ等に就いては、後段に於いて言及するであらう。

第二章　民族及び種族

民族意識、種族意識が、如何に黨派意識、階級意識等に優先するか、といふことは、第一次世界大戰の當時、露骨な事實として、證明せられたことであつた。大戰前までマルクス主義者によつて指導せられた歐洲諸國の社會民主黨は、ブルジョア階級の民族的感情は、階級意識に目醒めた勞働者には何の影響をも與へることは出來まい、民族的軋轢は、

プロレタリアに何のかゝはりもない、諸國の社會主義的政黨は、ヨーロッパ戰爭を防ぐ屈强な障壁を造つてゐる、と信じてゐた。然るに、大戰勃發前の民族性鬪爭は、そのやうな妄信を一場の幻覺に歸してしまつた。勞働者の階級意識によつて、民族性鬪爭が阻まれたことなどは少しもなく、それとは反對に、民族性鬪爭そのものが、却つて勞働者の階級意識を阻んだのである。千九百十四年八月の始めに、列强の宣戰布告が發せられた時、崩壞したものは民族意識ではなくして、却つて社會主義的勞働者インターナショナルであつた。

民族内に階級を生ずることは、たしかに民族そのものゝ一大缺陷である。その爲めに、勞働者階級は、階級的鬪爭意識に疲れて、民族意識を喪つたかの觀を呈するのであるが、民族意識はそのやうな薄弱なものではない。それが發揮せられることを必要とする事態が生ずれば、階級、黨派等の一切の意識に優先するのである。而して、何等かの方法によつて階級鬪爭が解決せられ、勞働者が政治的公民の地位を得、或は政治的權力を握る地位を得たならば、彼等は自らを民族として構成し、民族的な存在を實現し、民族的感情を持つや

うになるのである。斯くして彼等は、嘗てその民族性意識を攻撃し、その國家的組織を攻撃したブルジョアジーの民族主義と、本質的に全く同じものに歸する。吾々は、ロシヤの實際に於て、その實例を文字通りに實見したのである。コミンエルンの世界赤化運動は、世界的パンスラヴイズム、或はその指導者がユダヤ人ならば、ユダヤ族の世界的陰謀以外の何者でもない。精密を裝ふマルクス經濟學の理論も、巧緻を衒ふ唯物辯證法も、要するに民族的制覇の手段に過ぎないのである。共産黨の極意は、そのやうな學術や理論にあるのではない。他國に內部的抗爭を惹起し、その國家組織を破壞し、他民族を壞滅に頻せしむることにあるのである。而してその結果は、主動的な民族が壓倒的勝利を得ることゝなるのである。是れは、意識的に行動すると、或は潛在意識として、他の幻影を追ふて行動するとに拘らず、人類として免れ難き本能に屬するのである。立體的群たる民族、種族等が、平面的群たる宗派、階級等を吸收同化するといふことは、此の事例によつて明であらう。今次の歐洲戰亂に際しての事例に於いても、此のことは餘りに明瞭に證明されてゐるので、最早是れ以上說明を加へる必要はないであらう。

抑々民族及び種族の本質は、如何なるものであるか。民族に就いての一般的定義は、血緣共同態、性格共同態、言語共同態、文化共同態、運命共同態等として規定せられてゐる。それ等を全部綜合した共同態が民族であると言へば、間違ないであらう。即ち、血緣關係による體質及び性格が近似し、生活の地域が相接し、從つて又生活の態樣たる言語、文化等の相似たる一群の人類を稱するのである。而してその近似の程度地域の遠近の差こそあれ、この定義はそのまゝ種族に適用することが出來る。

是等の近似性、共同態の生成は、畢竟祖先を共有するといふことに歸するのである。即ち、その祖先時代に於ける一つの家族的群であつたことを意味するのである。家族的群といふのは、今日の家族といふ意味ではないが、夫婦關係、親子關係、兄弟姉妹の關係にある一群の人類を總稱するのである。近世の家族制研究者のモルガン等は、概ね男女の夫婦關係を基準として原始雜婚的集團、世代層に分れる血族集團、集團的結婚をなすハワイ諸

島のプナルア家族等を以て原始的家族形態となし、これより母權制家族、父系家族、一夫一婦制家族の生成を論ずるのであるが、その間には例へばプナルア家族を以て世界的に普遍なる原始家族形態となすが如き獨斷、或は又言語學的研究の不充分の爲めに、父、母等の名稱が一種の尊稱として、或は性交と沒交渉な社會秩序の名稱として使用せられた習慣を無視して、是等を總て性父に關係あるものゝ如く看做す誤謬等、多くの獨斷、誤謬の介在することは既に諸方面より指摘せられた所であるが、問題は斯かる部分的瑕疵のみに止まらずして、全體としての研究態度が、斯く夫婦關係のみを基調とするのは大なる偏見であつて、科學的見地よりすれば、親子の關係或は兄弟姉妹の關係は、夫婦關係と同樣、或はそれ以上重大なるものである。從つて親子關係の本能は、夫婦關係の本能に劣らず、是等の本能によつて結合したる原始人類の群が、即ち家族的群である。

以上の如き原始的人類群の後裔は、今日の種族である。而して、種族の分化したるものが民族である。此のことは、同一種族に屬する各民族が、體質及び性格に於いて近似し、生活地域に於いて接近し、言語、文化等に於いて類似することによつて明確に證明せられてゐる。全地球表面は、諸種族の分化したる諸民族によつて占據せられてゐるのが、今日までの自然的世界秩序である。而して、斯かる民族が更に分化するか、或は綜合するかは、將來の歷史の發展に懸つてゐるのである。

人類の進歩に伴ふ文化の發展、經濟の發展、交通の發展は、期せずして各民族を接近せしめ、同化せしめる。今日の民族を更に體質的に、性格的に、文化的に分裂せしめることの不可能なることは、何人にも明瞭である。明に、歷史は綜合の傾向にあるのである。然るに、分析の外に能事を知らない舊式科學者流は、此の自然的綜合の傾向に反して、民族を階級的に分裂せしめ、黨派的に分裂せしめ、思想的に分裂せしめんとする。斯かる人爲的分裂の工作が、自然に對する反逆として、歷史の必然を以て淘汰せらるべきことは、言ふまでもない。階級、黨派、思想團體の如き平面的群が、民族の如き立體的群を吸收同化するのは、人類の退化滅亡現象の外には有り得ないことは、既に述べた通りである。然ら

ば、斯かる綜合の傾向は、如何なる事態に歸着するのであるか。それは實に、種族より分化したる民族が、又種族に還元する綜合である。凡そ、祖先より子孫に至る人類の發展は、常に分裂の時代と合同の時代とを交互に經るものであつて、幾代かの祖先の結婚の反復によつて分化したる人々は、又幾代かの子孫の結婚の反復によつて合一するものである。祖先と子孫とは、共に共有される。文化的にも、地域的にも、亦同樣の經路を辿るのが必然である。今日の歷史の大勢は、種族の合同にあり、種族意識の覺醒にあるのである。此の意識を缺く人種は、種族として退化せるものであるから、必ず滅亡に至る。恰も、過去の歷史時代に、民族意識を喪つた民族が滅んだのと同樣である。その適例は、歷史研究者の周知する如く、印度人である。印度人は民族意識を喪失したが爲めに、英國の一會社は、印度人を驅使し、印度兵によつて、印度を征服してしまつたのである。今日及び明日の歷史に於いては、此の事例は種族意識に該當するのである。若し或る種族が、その種族意識を喪ふが如きことあらば、他の種族は相手を驅使して相手を征服するの策を採ることが容易である。

更に是等に就いての一層具體的なる考察は、國家及び國際關係の一般理論に俟つべきものであつて、之を以下に述べる。

第三章　國家及び社會

民族に續いて直に論ずべきは、國家である。一民族が一國家を形成することが、世界の常態であるから、民族と國家とは、關聯せる觀念である。勿論、歐洲に於いては、一民族が諸國家に分れ、一國家が諸民族によつて構成せられてゐる例が多々あるから、民族と國家とは必ずしも一致せず、又それが歐洲の不斷の混亂の原因をなしてゐるのである。今日の一國家が歷史上の諸民族によつて構成せられてゐる例は、全世界に亙つて更に多く、日本の如きも、歷史上の一民族によつて構成せられてゐる國家とは言ひ難いが、それ等の諸民族が血統上に融合同化して、性格共同態、言語共同態、文化共同態を成就し、今日一國

家を構成して居れば、今日の一民族に外ならぬのである。スイスの如き、ベルギーの如きは、それと事情を異にし、異なる言語を使用し、異なる文化と傳統とを持つ諸民族によつて造られてゐる國家であるから、民族とは全く異なる觀念である。然しながら一國家を組織してゐる以上は、生活境が共同であり、運命を共同にするのであるから、血緣上にも互に同化し、國家も亦努めて同化融合せしめんとし、今日二種の言語を公用語にするやうなことがあつても、漸次一種に統一することに努めるであらう。故に今日では、スイスのドイツ人が、ドイツへの復歸を要望してゐないことは、ベルギーのフランス人がフランスへの併合を要望してゐないのと同樣である。斯くして、諸民族は一國家を組織するが故に、一民族に融合せんとし、一民族が一國家を形成するといふ原則を、歷史上に實現して行くのである。

民族と國家との關係に次いで、特に注意すべきは、國家及び社會なる二つの概念の關係である。國家と社會とを區別したのは、ヘーゲルに始まる。それ以前の學說、例へばカントに於いては、國家と社會とは明に區別せられず、社會といふ概念は、殆んど家族概念、民族概念及び國家概念の形式の中に存在してゐる。然るにヘーゲルは、國家と社會とは別個の、互に影響し合ふ構成であると考へた。彼の見解によると、國家は一般の合理的な意志を基礎として立つてゐる憲法組織である。勿論その憲法は、成文たることを要しないが、憲法は國家の秩序である。而して、その憲法組織の基礎たる意志は、個人の自由な、合理的な意志であるといふのである。それは畢竟、民主國家の憲法組織を意味してゐるのであるから、民族群の機能と、斯かる民主的法律組織の機能とは、勿論一致せず、國家と社會とを別個のものと觀念したのも當然であらう。殊に、ヘーゲルの國家なるものは、その著「法律哲學」の中に明言してゐる如く、歷史的に發展し、現實に存在する國家ではなくして、哲學的に思辨せられたる理想國家に過ぎないのである。而して彼は、國家組織以外の人類の結合、特に個人の欲望滿足の爲めにする經濟的結合が、社會であると考へたのである。此の考は、根本的に誤りであつて、國家を斯く狹小特殊なる意義に定義す

ることゝ、法律的組織と經濟的結合とを別個に取扱ふこととは、共に謬見に基くものである。然るに此の學說は、學界に多大の感化を及ぼし、之を繼承したる多くの學徒の中には、國家そのものを、個人の自由を制限し、社會的階級の差別に基き、之をその法制によつて維持する所の法律組織であると考へるものを續出した。

若しもヘーゲル及びその弟子達が、東洋の國家及び民族性を深く知つてゐたなれば、彼等は決して斯かる誤謬には陷らなかつたであらう。東洋の民族は、國家が如何に發展しても、その家族主義を棄てないのである。國家は憲法組織であるといふやうな定義は、東洋の諸民族にあつては一部法律專門家の學說の一種たるに止まり、民族の信念及び實踐には極めて緣遠きことである。勿論、ヘーゲルの歷史哲學にあつては、そのやうな東洋の民族は人類の太古史の部分に屬するものであつて、歷史の發展は自由の發展であるといふ思想であるから、具體的には、近代國家は民主々義國家であるといふことに歸するのであるが、斯かる思想が如何に誤謬であるかは、彼の法律哲學に於いて、國家と社會とが別個のものになつてしまつたことによつて、如實に證明せられる。人は一義的なる人であり、人の生活は一義的なる生活であるべきである。それが國家と社會とに別々に歸屬するものならば、一個の人に於ける二重生活二重人格を如何にして解決すべきであるか。必ず本末、輕重、正邪、等の差を以て、その一つを主とし、他の一つを從としなければならぬ。マルクス等は斯くして、社會を主として、國家を從とし、國家を否定することを理想としたのである。そのやうな思想が如何に誤謬であるかは、現實に生成したる社會主義者の集團が、國家的組織による外に存立の途なく、最も舊式な專制君主型の國家として再現したことによつて、如實に證明せられてゐる。

國家の本質は、そのやうなものではない。人類の集合が群に發展し、その群が組織體に發展したとき、その組織體の段階を國家と稱するのである。集合及び群なる名稱は、數學上の定義と根本に於いて相似たるものであつて、集合とは、範圍の確定したる物の集りを云ひ、群とは、その集合をなす個々の物の間に何等かの結合法を有し、結合の結果も亦そ

の集合に屬する狀態を云ふのである。民族は即ち此の群である。而して、此の群が發展して組織體を造るのは、群の擴大及び內部の精密化によること勿論であるが、更に大なる原因は、外患戰爭によるのである。群と群との鬪爭に於いては、團結力が强固であつて、その群全體が有機的に活動し得るものが、必ず勝を制する。その爲めには、群の統制力が一つの中心に歸すること、及び群の各分子がその中心統制力に服從することが絕對に必要であつて、それは一つの組織體の構成に外ならない。民族群は玆に於いて國家に發展するのである。

國家の本質が斯くの如きものであるから、如何に民主々義を標榜するものと雖も、それが生成發展の過程にあるときには、例へば十八世紀に於けるアメリカの獨立當時の如く、必ず英雄的な中心人物があつて、國民全體を統制し、國民はその唯一統制力に服從する實狀にあるものである。眞に民主々義が發展して、中心が不定となり、意志の決定が多數者に依存するが如きは、組織體の退化であり、國家の衰頽である。而して、斯かる衰頽の際には、國家の內部に分裂を生じ、民族は階級に分裂し、黨派に分裂するが如き退化現象を生ずるのが常である。ヘーゲルは、此の退化現象を進化の如く錯覺したのであつて、マルクスはその錯覺點から出發して、階級分裂を思考の出發點にしたのである。是等は悉く國家の本質に觸れざる謬見である。

眞の國家に於いては、法律制度や經濟機構の如きは、寧ろ從たるものである。例へば、日本に於いては、古代氏族制度を終止せしめたる大化革新も、封建制度を撤廢したる明治維新も、共に同一皇室に對する忠誠の精神を以て實現せられ、制度は根本的に革つたのであるが、共に皇政に復古すること、家族主義の本義を實現することを理想として遂行せられたのである。即ち、民族組織體たる國家意識は、一切の法制經濟觀念に優先し、民族組織の內部的發展は、國家の變革たる革命として無用の混亂犧牲を拂ふの妄に陷らず、同一國家の發展たる維新として實現せられたのである。

斯かる見解に於いては、國家と社會とを區別する必要は毫もなきのみならず、人の生活

は、その公的生活たると、私的生活たると、政治的生活たると、經濟的生活たるとを問はず、悉く國家生活であつて、社會なる名稱は、全く無用に歸する。從つて本篇中にある社會なる文字は、單に人類の各種の集合なる意味に於いて使用したものである。

今日の世界は、明に國家の群立狀態である。而して國家は、その本質に於いて、民族組織體と一致するものであるから、民族國家が世界の現存秩序の基底であることは明である。此の秩序が如何に發展し、將來如何なる秩序を生成するかは、常に歷史の法則の問題に懸つてゐるのである。

第四章　國際世界の構造

結合は發展の方法である。小なる單位のものが、何等かの結合法によつて、大なる單位のものに進むのが、進化の原則である。若し人が、自然進化の跡を顧みて、エネルギー粒子の結合が原子となつて物質に發展し、原子の結合が分子となり、分子の結合が細胞を造つて、有機界の高階なる存在形態を實現した經路を通觀するならば、この原則は宇宙の眞理であることを、直に了解するであらう。人類世界に於いても、此の原則は例外なく適用されるのであつて、民族國家の生成まで發展した世界は、更に何等かの結合法によつて、一層高階なる集團に進まんとするのが、歷史の法則である。而して此の法則は、具體的に、民族群より種族群に發展する傾向にあることは、既述の如くである。然るに、世界の諸國には、世界の將來の構造について、各種の異つた思想が存在する。

歐洲の舊式世界秩序は、一民族が他の諸民族を支配し、世界の大部分を殖民地化せんとする制覇式秩序であつて、それは反つて秩序を否定する思想であり、一民族と他民族とを結合する思想ではなくして、支配者と被支配者との對立を釀成して、之を分裂せしめんとする思想である。斯かる思想が自然進化と人類發展の大道に適せず、早晩是正淘汰せらるべきことは必然であつた。それとやゝ異る世界秩序の理念を持つものに、アメリカとロシアとがある。アメリカはその父祖以來の傳統的理想として、民主々義による世秩界序を要望

するものである。確に、十八世紀にアメリカの父祖等がその獨立運動に成功した頃には、民主々義は人類解放の聲であつた。然るに、其の後の世界の發展は、民主々義を以て、一種の經濟秩序を固定した。政治上の自由を追求したアメリカの住民は、經濟上の强制に陷つた。資本主義的秩序これである。ロシアの社會主義者は之を評して、搾取の秩序であるといふ。然るに、いづくんぞ知らん、そのロシアも亦、方向に百八十度の差はあるが、同樣に搾取の秩序に陷つたのである。經濟上の自由を追求した社會主義者は、政治上の强制に陷つた。共產主義は經濟の政治化を要求するから、一國內に一樣の政策が行はれる爲めには、期せずして强力なる中央政權の存立を必要ならしめ、ロシアの成文憲法には何處にもそのやうな條項が見當らないに拘らず、實際は君主專制型の獨裁制を樹立したのである。その獨裁政權は、國內に於いて、自由と生命との大規模な搾取を行ふと共に、その國際共產主義によつて、他國の國家組織を破壞し、革命內亂を惹起せしめて、之をロシアのブロック內に誘導せんとする新型式の帝國主義を實現した。アメリカ式世界秩序の基調が、物質的、經濟的搾取にありとすれば、ロシア式世界秩序の基調は、思想的、政治的搾取にあると言へるであらう。互に角度方向を異にするが、要するに舊歐洲式の制覇的秩序の變形せるものであつて、その本質は秩序にあらずして、鬪爭であり、民族の結合にあらずしてその分裂である。

以上は、近世歐米に於ける世界秩序の理念であるが、何れも眞の秩序に到達することの出來ない缺陷を持つて居る。西洋文明は、分析の方面に於て東洋より優れてゐるが、綜合の方面に於いて遙に劣つてゐる。その劣れる點が、人類世界の結合觀に於いて露骨に現れてゐるのである。舊式の西洋秩序は、民族以上に一步も出ることが出來ないといふ點に於いて、進化の行き詰まりを示すものである。新式の西洋秩序はその行き詰まりを橫斷的に打破して、民主々義或は共產主義を標榜する國際結合を企てるものであるが、民主々義或は共產主義そのものは、民族を黨派或は階級に分裂せしめることを前提とし、之によつて立體的民族群を平面化し、平面的結合として將來の世界を構成せんとするものである。然

るに、既述の如く、立體的群が平面的群に轉ずることは、大なる退化であつて、本質的には、舊歐洲の行き詰まり思想よりも一層劣惡なるものである。

惟ふに、近代世界は民族的結合の時代であるが、最後の理想たる全人類の結合に至るまでには、種族的結合の時代を經ねばならぬ。地理的に言へば、現代は數十箇の國家の分立時代であるが、世界一家に到達するまでには、數箇の國家の分立時代、即ち地球上の夫々の方面に大領土を有する大國家の分立時代を經ねばならぬ。而して、その大國家の內容は、決して平面的なる階級群或は黨派群ではなくして、民族群の發展したる種族群でなければならぬのである。

立體的群の結合法は乘法を以て表現せられることは既述の通りで、此の結合は一般生物に於いては、本能として作用するのであるが、智性及び德性の高度に發達せる人類に於いては、道義意識として作用する。之に對して、平面的群の加法結合は、利害觀念として作用するのである。即ち、人類世界の現階段に於ける結合法は、道義結合と利益結合との二つであつて、西洋式世界秩序の基礎は何れも利益結合を出ないのであるが、歷史が必然に要求する人類世界の將來の發展は、その結合によつて成就することは不可能であつて、たゞ一層高階なる立體群を生成し得る道義結合のみが、よくこの要求を滿足し得るのである。

道義結合の內容は、東洋の民族が尙ほ多分に保有する家族主義の實現に外ならぬ。故にそれは、常に最も新しい方法であると共に、最も古い方法であり、進步と共に復古を意味する。支配者と被支配者との對立、階級、黨派等一切の平面的分裂は、たゞ立體群の家族主義によつてのみ解決せられる。若し人が日本の歷史を研究するならば、古代の諸民族が如何にして一民族に結合せられたか、そこには征服者と被征服者との別による制覇式秩序の如きは何等の永續性なく、今日の敵は明日の友として、被征服者の男子は重要なる公職に就き、その女子は征服者と名譽ある正式結婚をした等の事例が、常態として見出され、民族の差別による奴隸制度の如きは、その痕跡すらないことを見出すであらう。道義結合

とは、斯くの如きものをいふのである。而して斯かる事例は、西洋の歴史に於いて殆んど發見し得ざるものである。諸民族は、此の結合法によつてのみ、一層高階なる人類群及びその組織體に發展し居るのであつて、歴史の原則は最早西洋流の世界秩序、否世界混亂に終焉を宣言し、將來の人類世界の發展は、東洋式秩序及び東洋式結合法によつてのみ可能なることを明確ならしめんとしてゐる。

道義結合による種族群こそは、明日の人類世界に於ける秩序の基調であつて、それは全人類的結合の第一歩である。東亞新秩序は、此の世界新秩序の發端でなければならぬ。

第四篇　世界秩序における群の理論

第一章　群論の略解

人類世界の新秩序が、如何に創造せらるべきか、といふことが、全世界の歴史的な提案になつてゐる時、單に社會的、政治的、或は經濟的論義に終始するだけでは、事態の本質を根本的に把握することが困難であつて、一層廣く、且つ一層深い觀點に立つ科學的研究が必要であると思はれる。此のやうな科學的研究の根本觀念の一つとして、最も適當なるものは、數學上の群論であらう。群論は、數學上の最も深遠な思想の一つであつて、ワイルによつて、量子力學上にその廣大なる應用が示され、ドンナン、マイヤー等は、生物學の研究方法として、群論の適當なることを示唆してゐるのであるが、未だそれに就いて確實な提案のあつたことを聞かない。況んや、社會的事象の研究に、そのやうな理論の應用

されることは、殆んど想像外にある現狀であるが、筆者は社會的事象の研究にこそ、群論的方法は最も必要であつて、それは社會科學を自然科學の精度に引き上げ、或は社會科學と自然科學とを渾一ならしめ、最近の量子力學上に於ける如き、深遠なる原理を提供するものであると考へるのである。

群論と言へば、吾々は直にかの薄命の二人の天才ガ、ロアとアーベルとを想ひ出す。ガロアは西紀千八百三十二年、二十二歳を一期として、決闘場裡で敵彈に斃れた天才であつた。彼は決闘の前夜、到底一命を全うし得ないことを豫期して、殆んど一睡もせずに方程式論の研究の結果を書き續け、之を後人に委託しやうとしたといふことである。アーベルは、西紀千八百二十九年、二十八歳を一期として散つた天才であつた。彼は數學史上の最高峯の一人で、現代の精鋭數學の中に數へられる抽象代數學や積分方程式論の第一章には、必ずアーベルの名を擧げねばならない程の獨創家であつたが、その生涯はめぐまれず、死の直前まで、幾年か前に巴里の學士院へ提出した大論文の審査の結果を待ち詫びたが、不幸にしてその論文は、それを受け取つた權威者の文庫の中に置き忘れられてゐた爲め、その大功績を認めた審査の結果が到達したのは、アーベルの死後一週間目のことであつて、人々の涙を新にしたといふことである。彼等は、宇宙の詩人であつた。狹い人間生活を彷徨する感情の詩人ではなくして、自然の深奥に突入して、その神秘を探究した眞理の詩人であつた。群論の發展は、實に此の二人の天才の研究に負ふものである。

數學上の群の觀念は、位置を轉換すること、即ち變位或は置換の研究から發生する。世界の秩序を如何に更新するか、といふやうな問題は、要するに、現在の排列を新なる排列によつて置換へやうといふ問題であつて、それは根本的に置換そのものゝ研究に歸せられ、從つて、群論の思想が如何に重要であるかゞ分るであらう。例へば、玆に甲、乙、丙の三人の人物があつて、何れも立派な人物で、部長にも、局長にも、所長にも成り得るものと假定する。此の三人を、部長、局長、所長の順位に從つて、甲乙丙の順に配列するか、或は甲と乙とを入れ替へて、乙甲丙の順に配列するか、その甲を更に丙と入れ替へ

て、乙丙甲の順に配列するか、等の問題は、所謂順列の理論として、初等代數學でよく知られてゐることである。そこで、その中の一つの順列を、他の一つの順列によつて置換するのが、變位である。例へば、甲乙丙の順列を、乙丙甲の順列に替へることをR變位と名づけると、それは、甲を乙に、乙を丙に、丙を甲に轉換する意味であつて、必ずしも最初に甲乙丙の順序に並んでゐたことを表すのではない。故に、最初に乙丙甲の順序に並んでゐたものなれば、それを丙甲乙の順序に替へることは、やはりR變位である。そこで此の場合には、甲乙丙をそのまゝ甲乙丙に替へる無變位の變位をP變位とし、甲乙丙を丙甲乙に替へるのをQ變位とし、甲乙丙を乙丙甲に替へるのをR變位とし、甲乙丙を丙乙甲に替へるのをS變位とし、甲乙丙を甲丙乙に替へるのをT變位とし、甲乙丙を乙甲丙に替へるのをU變位として、合計六通りの變位がある。是等の中で、S變位を行つた後に、更にT變位を行ひ、その結果、R變位に到達したことを、SとTとを結合し、その積がRであるといふ。そのやうにすると、以上六通りの變位の何れか二つを結合した積は、必ず此の六通りの中の何れか一つである。即ち此の六通りの變位の集合は、如何に組合せても、その結果は集合自身の中に歸入するので、是が群の第一條件であつて、此の六通りの變位の集合は、一つの群をなしてゐる、といふのである。通俗觀念では、甲乙丙の三人が群をなしてゐる、といふのであるが、數學上では、その三人の地位の變換が、一つの群をなしてゐる、といふのである。

此の群には、種々興味ある性質があるが、その中の一つは、S、T、Uなる變位は、何れも甲乙丙の中の甲と乙とを取替へるやうな、唯一回だけの轉換、即ち奇數轉換をなす變位であるが、P、Q、Rなる變位は、甲を乙に替へ、その乙を更に丙に替へるやうな二回の轉換、即ち偶數轉換をなす變位である。而して、此の後の三通り、即ちP、Q、Rは、それ自身で群をなしてゐる。何となれば、此の三通りの中の何れか二つを結合した結果は、又此の三通りの中の何れか一つに歸するのである。斯く、群中に群をなしてゐるものを、部分群といふ。而して、此の場合の部分群には、顯著な特性がある。そのことを述べる爲

め、少しく豫備的な說明を加へる。

多くの變位の集合が造る變位群の一つ〻〻の變位を、その群の元といふが、總ての元には、その逆元といふものがある。例へば、甲乙丙の順列を乙丙甲の順列に替へるRなる元の逆元は、乙丙甲の順列を甲乙丙の順列に替へる逆變位のことである。そこで、一つの元とその逆元との結合の結果は、最初の順列に歸る、といふことに直に分る。一つの順列を、そのまゝの順列に替へる變位、即ちPのことを、單位元と呼ぶ例であるから、右のことを言ひ換へると、或る元とその逆元との結合の結果は、單位元になる、といふこと、無變位になるといふことである。然るに、或る一つの元に、他の一つの元とその逆元とを結合した結果は、必ずしも無變位ではない。例へば、Tの前後にRの逆元とRとを結合する、言ひ換へれば、Rの逆元なる變位を先づ行ひ、次にTなる變位を行ひ、更にRなる變位を行ふと、その結果はSなる變位になる。それはTと同じではない。斯樣に、R及びその逆元を、Tなる元の前後に結合することを、Rを以てTを變換するといふ。そこで、前の部

分群の問題に戻つて、そのP、Q、Rなる變位は三つの元に外ならぬが、此の變位群には、その他にS、T、Uの三つの元があることは、既述の通りである。そこでS、T、Uの各々を以てPを變換すると、その結果は常にPであり、是等を以てQを變換すると、その結果は常にRであり、又是等を以てRを變換すると、その結果は常にQである。即ち是等の變換の結果は、常にP、Q、Rの何れかに歸するのである。即ち、此の三つの元の造る部分群は、他の如何なる元を以て變換しても、變換し切れない。常にその部分群の中に歸入して、部分群そのものは變換に對して不變である。このやうなものを、不變部分群と稱へる。總て群には、變化しながら、しかも變化しない、といふ性質があり。是が最も大切な性質である。

更に、不變群部分の構造を調べると、種々興味あることが分つて來る。その中で特に注目すべきことは、單位元が必ず存在することである。この單位元といふものは、頗る特長のある性質を持つてゐる。即ち、他の如何なる元を以てする變換に對しても、不變であ

る。一つの元に單位元を結合すると、前から結合しても、後から結合しても、その結果は、やはり最初のまゝの元である。總て、變位群に於いては、一つの元に他の元を前から結合するのと、後から結合するのとによつて、換言すれば、その前後の順序によつて、結果は一般に異つて來るのであるが、特にその結果が同一になるやうな元の全體は、一つの不變部分群を造る。それを、その群の核心といふのである。斯かる核心中の核心ともいふべきものは、單位元でめる。群の核心は、不變部分群であることもあるが、又單位元一つであることもある。そのやうな場合には、單位元は自身で不變部分群を造つてゐると考へられる。群には必ず單位元があるから、言ひ換へれば、群には必ず核心がある譯である。

變位群の單位元は、一つの順列を、そのまゝの順列に替へること、即ち不變位である。その不變位が核心となつて、變位群が造られるのである。

以上の如き群の理論の重要性は、直ちに了解されるであらう、廣く人類世界の社會的事象を通觀すると、一つの黨派と他の一つの黨派との勝敗の順序を如何に替へるか、一つの

團體と、他の一つの團體との優劣の順序を如何に替へるか、といふやうな問題が、要點をなしてゐる。それ等は長い歴史の中に、變位群の問題に歸せられる。而して、此の場合には、一つの團體、黨派或は階級等と、他の一つの團體、黨派或は階級等とを對比させるのであるから、要素が二つであつて、上記の甲乙丙の三つの場合より一層簡單な變位群の例である。その一つを甲として、他の一つを乙とすれば、甲乙なる順列を、そのまゝ甲乙なる順列に替へる第一變位と、甲乙なる順列に替へる第二變位と、この二つの變位が元となつて、一つの群を造る。その際の單位元は、勿論第一變位であつて、その不變位の變位が群の核心となるのである。第二變位の逆元は、乙甲なる順列を、甲乙なる順列に替へることであつて、それは、その元自身と同一である。從つて、第二變位を二度行つた結果は、第一變位に歸る。そのやうな循環が、所謂歴史の循環性ではないかと思はれる。從つて結局は、不變位の變位に歸する。

第二章　自然秩序と群論

多くの事物の間に於ける變位は、二つの事物相互間に於ける變位の合成である。社會は人を要素とする集合であるが、その人の行爲は、常に主觀と客觀との對立形式によつて律せられる。自己と他人、我と物、等の二要素の相互間に於ける各種の變位が、社會現象の單位要素をなすものである。斯かる變位要素の集合が、如何なる態様を呈すかは、頗る重要なる問題である。今前例にならつて、a、bなる二要素及びc、dなる二要素間に於ける變位の集合を考へよう。

abをbaにする變位をLとし、abをそのまゝabにする無變位をIとする。又cdをdcにする變位をMとし、cdをそのまゝcdにする無變位を同様Iとする。次にabをbaにする變位と、cdをdcにする變位との結合した變位をNとし、abをそのまゝabとし、cdをそのまゝcdとする無變位の結合を、同様Iとする。さすればLとIとの結合はLであり、MとIの結合はMであり、NとIとの結合はNである。Lの自乘、Mの自乘、Nの自乘は、何れも皆Iである。LとMとの結合はNであり、MとNとの結合はLであり、LとNとの結合はMである。又LMNの結合はIである。斯くして、I、L、M、Nなる變位の集合は、明に一つの群を造る。然るに、此の際特に注意すべきことは、此の群の要素たるa、b、c、dによつて構成せられる $ab-cd$, $a+b+c+d$, $(a+b)-(c+d)$ 等々の諸式は、此の群の元たるI、L、M、Nのあらゆる變位に於いて、その値が少しも變化しないことである。斯かる諸式を、此の群の不變式といふ。

群は一般に、斯かる不變式を持つのである。相對的なる變化の反面には、常に絶對的なる不變化が存在する。社會現象に於いては、人爲的な變位に、自然的不變位が對應するのが常である。例へばa、bなる要素によつて造られてゐる團體と、c、dなる要素によつて造られてゐる團體とがあれば、そのa、b相互間、或はc、d相互間のあらゆる變位に拘らず、兩團體の差遠たる $(a+b)-(c+d)$ は不變であり、兩者の全體たる $a+b+c+d$ は

不變である、といふ如くである。そこで、一つの概念が變位群について言はれてゐるか、或はその不變式について言はれてゐるか、によつて、重大な差違を生ずる。例へば、民族國家といふ場合には、不變式上の概念である。歴史上に、制度代は幾度か變換し、氏族制度の時代があり、封建制度の時があり、或は資本主義制度の時代があつても、民族はそれ等のあらゆる變換に拘らず、不變である。此の不變性は、人爲の變換を超越せる自然の體制である、といふ處にその本質があるのである。

一つの群の不變式は、上例によつて明な如く、一つに限らない。不變式の或る形式が、又群を造る場合がある。例へば、$ab-cd$ なる不變式を以て、$ab-cd=1$ なる方程式を造ると、此のやうな條件を充たす a、b、c、d は無限に存在し、それ等の一組によつて造られる行列の無數の集合は、一つの無限群を造る。是が有名なモーヅル群である。斯く、或る要素の集合が造る群と、その群の不變式の形式が造る群とは、丁度人間が意識的に造る人爲群と、その意識を超越して、自然的に造られる自然群とに對應する。以上述べた群の例は、概ね人爲群の例であるが、それ等に拘らず、實際自然はその自然力を以て、自ら變位を施し、變換を行ひ、そこに諸種の自然群が形成されてゐるのである。人類世界の自然群とは如何なるものであるか。以下にそれを概説しよう。

言ふまでもなく、人類は生物の一種であるから、人類の自然群は、生物一般の自然群と同樣である。されば、自然群に就いての理論は、生物學的群論、或は生命體の群論とでも稱すべきものである。第一に、吾々の前にある問題は、生物は自然界に於いて、如何にして群を造るか、といふことである。それに對して、先づ答へねばならない。

一つの家族、氏族、民族、種族等の、過去及び未來に於ける一切の構成員の集合は、一つの無限群を造る。此の事を證明するには、その構成員は何れも皆、生と死との法則によつて配列せられる有限の存在者である、といふことを指摘せねばならない。若し吾々が、現在といふ瞬間に於いて、此の集合を二大部分に分ち、死の過去に葬られたる一切の存在者に對して（一）なる符號を與へ、生起せんとする未來の一切の存在者に對して（＋）な

る符號を與へ、此の二大部分の各々に於いて、死の時或は生の時を基準として、時の順序に從つて各存在者に番號を與へ、同時の多數存在者には、空間の一點を基點として、場所の順序に從つて番號を與へるならば、現在なる時と所とを代表する0を加へて、整數全體の系列を造る。此の無限系列は、即ち一つの無限群である。結合の法則を加法に取り、核心たる單位元を0とし、各元の逆元は、絶對値等しくして、符號を異にする整數である。吾々が、現存者と稱するものは、上記の過去と未來との二部大分に於いて共に算入せられる者、換言すれば、二回算へられるものである。過去の部に於いて算へられる番號を（−n）とすれば、未來の部に於いて算へられる番號は（+n）である。故に彼は、此の群の一つの元と、その逆元とを、二重に代表するものである。生物學上の現存者とは、常に斯くの如き二重性を有するものであつて、それ自身の中に逆元を藏するものである。故に、

$$(-n)+(+n)=0$$

なる方程式に從つて、現在なる瞬間を把握するのである。是れは、生命の數學的表示の一種である。

一つの家族、氏族、民族、種族等に於いて、その祖先と子孫との數は無限なるものと想定せられるから、是等は何れも皆、自然群を造る。而して、玆に横はる重要なる論點は、生と死との法則によつて支配せられる生物學的存在者は、斯くの如く、過去と未來とを包含したる系列、換言すれば、祖先と子孫との歴史的系列に於いて、自然群を造る、といふことである。

生物は又その棲息する境地との關聯に於いて、自然群を造る。生物體を構成する要素をa、b、c、d、e、f……等とすれば、是等は悉く棲息境地より攝取せられたるものであつて、又境地に還元せらるべきものである。故に、要素自體から言へば、境地にあつた時は、aacde……の配列にあり、生物體にある時は他の配列、例へば、baf……に在るものであつて、是は一つの變位である。而して、斯かる變位の集合が、群をなすことは、容易に推論することが出來る。何となれば、境地にあつた時の要素の配列は、幾度かの變位を經たる後に、再び還元せらるべきものであつて、その循環性

の不變位を單位元とする自給自足の變位の集合であるからである。生命現象の第一特徴として列擧せらるゝ物質代謝の本質は、斯くの如き變位群に外ならぬのである。是れ即ち生物世界の自然群の一種である。

以上の考を一層深くすれば、化學的に物質代謝と稱せられるものは、物理的に勢力轉換の現象に外ならぬ。境地に在る勢力が轉換して、生物體を構成し、それが又境地へ還元するのである。若し境地にある時の勢力のある狀態を、n次元空間に於ける一つのヴェクトルを以て表し、生物體をなす時の或る狀態を、他の一つのヴェクトルを以て表すならば、前者を後者へ變換するオペレーターは、nの二乘個だけの要素から成る行列として示される。而して、斯かる行列の集合が、一次變換群を造ることは、前段と同樣にして、容易に推論することが出來る。是れ即ち生物世界の自然群に外ならぬ。

以上の變位群及び一次變換群は、生物とその境地との不可分合一性の上に造られる、といふことが基礎要件である。而してその境地は、全地球表面に各々特殊性のある地域を造つてゐるものであるから、自然群は地理的關聯の上に成立する、といふことが明になる。乃ち、既述の歴史的な群をも考慮すれば、生物の自然群は、總て歴史的系列、或は地理的關聯の上に造られたるものである。それは、群の結合法則の要件であるから、群中に群をなす部分群、副群の如きものも、亦必ず歴史的系列或は地理的關聯の上に造られることは明である。例へば、家族は氏族の部分群をなし、小地域團體は、大地域團體の部分群をなす、といふが如くである。勿論、學術的には、その家群、氏族の人々が群をなすのではなくして、家族、氏族の系列が群をなすのである。又地域團體の人々が群をなすのではなくして、その地域と團體との交渉が群をなすのである。然しながら、是等は通俗觀念と學術的意義とが一々對應するから、通俗觀念の群なる名稱を、そのまゝ學術的意義に使用しても差支ない。

斯くして、今日の實際に於いて、地理的關聯及び歴史的系列の上に造られた人類の群の典型的なるものは、民族、種族である。それ等は、自然によつて造られた自然群である。

從つて、人爲群よりも一層根據の深い、又一層普遍的な性質を持つものである。人爲群の例は、黨派、階級の如きものである。この場合にも、學術的には、黨派、階級の人々が群をなすものではなくして、その優劣變位の爭鬪が群をなすのであるが、是も通俗觀念に一々對應すること、上例と同樣である。

此のやうな、自然群と人爲群との區別は、人々が直接に經驗する所であつて、之を心理的に說明すれば、自然群は本能によつて結合されるものであり、人爲群は利害觀念によつて結合されるものである。本能が觀念に優先する如く、自然群は人爲群に優先する。そこに、世界の自然秩序の大本があるのである。從つて、上記の諸原理は、之を平靜に考ふれば、餘り平明、且つ率直なことである。しかも、是等の餘りに平明、率直な原理が、文明諸國民によつて、餘りにも無視せられてゐるのである。その結果、世界は餘りにも不自然に混亂させられてゐるのである。世界秩序に於ける群論の重要性は、世界の自然秩序は如何なるものであるか、といふことを決定する必要に對應する。筆者は、此の小篇に於いて、一切の社會的、政治的論議を差控へるが、上記の諸原理の重要なる應用の一、二に就いて、若干のヒントを與へたいと思ふ。

第一に、局部的な利害關係の上に立つ黨派、階級の如き人爲群は、民族、種族の如き自然群の上に位すべからざるものである。換言すれば、人爲群の狹小なる利害によつて、自然群の自然的發展を害すべからざるものである。

第二に、歷史的、地理的考慮を犧牲にせる世界主義といふやうな幻想は、許さるべきではない。歷史的系列、地理的關聯の上に成立する世界の自然秩序は、均等の原則よりも、寧ろ不均等の原則を肯定する傾向にあるものである。

第五篇　東洋文化の眞髄

第一章　圓融無礙の哲學

東洋文化の發展は、物質文化の方面にあらずして、精神文化の方面にあり、分析文化の方向にあらずして、綜合文化の方向にある。一言以て之を掩へば、東洋文化の眞髄は、圓融無礙の哲學と還元歸一の道德とである。更に之を要約すれば、無礙一體の大哲理とその實踐である。

圓融無礙の哲學は、佛教學說發展の最高頂、天台の三諦圓融と華嚴の事々無礙法界觀とによつて、豪華な體系を以て表現せられた。然し、その思想は、印度に於いてのみ存在したものではなく、支那に於いてのみ發展したものでもなく、最も素朴な、しかも最も要領を得た最古の表現は、日本の神典に於いて見ることが出來るのである。それは如何なる點

に於いて見るかと言ふと、凡そ古今東西を通ずる思想界に於いて、最も普遍的な、又最も徹底的な問題は、生と死、善と惡との問題であるが、日本の神典は決して、生と死と、善と惡とを、對立的に見ない。伊邪那岐神と伊邪那美神との生死の交渉を叙述する一段に於いて、生と死とは共に平等の敬意を以て取扱はれ、死に對す恐怖、憎惡の如きものは、その痕路だに留めず、生死の問題が、圓融無礙の關聯の中に解決せられてゐるのは、全く奇蹟的な觀がある。善惡の問題も同樣であつて、日本の神典は、阿波岐原の禊祓の段に於いて、惡の代表たる禍津日神と善の代表たる直毘神とを、圓融無礙なる關聯に於いて取扱ひ、何等の差別觀、對立觀の餘地を與へない。殊に、禍津日神と直毘神とを並立して祭神とし、現在までその神社が存續するといふに至つては、その徹底ぶりに寧ろ驚くべきものがある。

此の圓融無礙の思想は、實に東洋思想の根底であつて、印度佛教に於いては、大乘諸家の經典に於いて顯現せられた。特にその哲學的根底は、般若部の經典に於いて詳說せられてゐる。近時の學者は、般若の空觀を解するに西洋哲學の辯證法を擬し、否定及び否定の否定といふヘーゲル論理學を以て之を說くやうな傾向があるが、是は全く見當違ひである。智者大師が、空假中の三諦は融鎔して一であり、三諦圓融であると喝破したる如く、假と空との間には、ヘーゲル哲學に言ふ如き矛盾とか、否定とかいふ觀念を容れないのである。圓融と矛盾とは、東洋哲學と西洋哲學との分れ目であつて、そこに本質的な相違のあることを知らねばならぬ。斯く圓融であるから、無礙である。それは本體と現象との相互間に於ける理事無礙なるに止まらず、又現象相互間に於いて事々無礙である。無礙法界にある現象であるから、一は即ち多であり、多は即ち一である。此の卓越せる賢首大師の哲學は、現代の世界思想界の最高問題を把握せるものと言ふことが出來る。若し西洋學說中にその類似を求めるならば、ヘーゲル哲學の如きものを以て擬すべきではなく、現代の最高科學思想たる群論的方法であると言ふべきである。變じて、しかも變じないもの、順と逆とが一團の中に鎔け合ふもの、そこに群論的方法の特長があるのであるが、圓融無礙

の東洋哲學は、之を根本的、普遍的原理とし、遠古の昔から、之を主調として一貫せるものである。

第二章　還元歸一の道德

圓融無礙は、多が一になる綜合統一の態樣であつて、東洋倫理は、これより流出するものである。社會生活の實踐に於いて、多が一になるには、還元の作用が必要であつて、東洋倫理は、特に還元の實踐を力說するものである。分派が中心に還元する忠、子が親に歸る孝、即ち是れである。

周初の聖賢周公は、天命に隨ふこと即ち人道であると考へ、孝と友とを道德の根本としたが、これは儒敎道德觀の先驅をなすものであつた。孔子は全的道德を表現するに仁なる語を以てし、而して、仁の根本的なるものは、孝悌であると敎へた。即ち親子、兄弟の道義に基礎を置く周公の說を祖述したのである。曾子は更に之を言ひ換へて、孝は德の本、敎の由つて生ずる所であると說いた。儒敎道德の根源たり、その要點たるものは、確に孝であつた。臣の君に對する忠は、支那に於いては、孝より後れて、孝に隨伴して發生したものである。從つて、頗る不徹底なものとなつたことは、既に多くの論者の指摘した所である。尙書の革命思想、即ち、王朝の更迭は天命が革まることを意味するのであり、天命が革まるのは民衆の向背によつて示され、而して民衆の向背は君主の德の有無による、といふ思想に於いては、忠は全く相對的なものとならざるを得ない。孟子の王道論、即ち仁政の思想も、斯かる革命論を是認する以上は、或る地域、或る時代、或る人物に限られた相對的政道に過ぎないものとなる。

忠の道德は、支那に於いては殆んど發達せず、單にその萠芽を示したに過ぎない。それが眞に理想的に發達し、普遍的に實現せられたのは、日本に於いてゞある。それは、萬世一系、一國一家の國體には、易姓革命の思想を容るゝ餘地なく、皇道と王道とは、絕對道と相對道との本質的相違を生ずるからである。この絕對道に於いて、忠は始めて絕對的意

義を得、忠と孝とは矛盾せず、忠孝一本の道德が成立するのである。

支那の忠が斯く不徹底であつたから、忠と孝との間の矛盾に解決し切れない問題があり、孝の解釋の中にも多くの無理を强いねばならない點を生じたのであるが、一部の論者の如く、之を以て忠孝の道德の破產であるかの如く、論ずるのは、大なる誤りである。忠孝は、それ等の論者の行使する分析的方法を以て論すべきものではなく、それは綜合的道德であるから、綜合的方法を以て論ぜねばならないものである。實に忠孝の本質は、忠の字がよく示す如く、分派がその中心に還元すること、末梢がその根本に歸入することにある。末梢たる子が、根本たる親に歸入するから、末梢相互間に於ける兄弟の友が實現するのである。分派たる國民が、中心たる大君に歸入するから、分派相互間に於ける國民の和が實現するのである。友と和とは、かく還元の作用によつて、實現されるものである。それは換言すれば、報本反始の祭祀の大精神である。そこに、友と和とは、敬と誠とに一致するのである。是れやがて、圓融無礙の哲理の實踐道に外ならぬ。

惟ふに、支那に於ける東洋倫理の發展が、頗る不徹底に終つたのは、その國家生活、その歷史觀にまで徹底するに至らなかつたからである。換言すれば、國體觀をなすにまで至らなかつたからである。而して、その徹底は、眞に日本に於いてのみ、實現されたのである。然しながら、實踐道德としての發展には、大いに見るべきものがあつた。漢の經學を代表する董仲舒、宋學の大成者朱熹を經て、明朝の王陽明に至つては、知行合一、致良知の實行哲學を說き、眞知は即ち行をなす所以、行はざれば知といふべからず、といつた先行後知說の如きは、實踐道德として、大に光彩を放つものである。

第三章　東洋文化の極致

圓融無礙は一體の哲學であり、報本反始は還元の道德であり、表裏をなして、東洋文化の眞髓をなすものである。而して、その最高理想、究極原理は、日本に於いて實現せられたのである。萬世一系、君民一體の日本國體、即ち是れである。それは哲學に於いて、倫

理に於いて、政治に於いて、全人間生活の實踐に於いて、時間的にも、空間的にも、一つの根本中心に歸入する一體的國家の實現である。

還元歸一は、根本中心の確立を意味する。それが時間的に確立すれば・不變であり、空間的に確立すれば、不動である。根本中心が不變不動なることによつて、末梢分派は無限に生成發展することが出來るのである。大なる變動が行はれる爲めには、大なる不變動がなければならぬ。大なる發展が行はれる爲めには、大なる保守がなければならぬ。是は數學的、物理學的眞理であるが、此の眞理を人間の國體生活に實現するのが、日本の國體である。而して、その究極に於いて、還元の哲學、還元の道德は、生々潑溂たる開展の哲學、開展の道德に轉ずるのである。

陰極まつて陽生ず、といふのは、易の原理であるが、東洋の哲學、道德は一般に陰性である。而して、日本は、地理的に東洋の極東にある如く、思想的にも陰性の陰極にあつて、玆に於いて陽が生するのである。即ち、印度思想にもなく、支那思想にもない、潑溂たる陽性の思想が、古來日本に於いて生成したのである。その代表的なるものは、日本神典の主調をなす產靈の思想である。

產靈は、創造開展の思想である。一切の事物を、固定的な存在面に於いて把へずして、發展的な生成面に於いてその本質を把へんとするものである。然しながら、それは還元歸一の極まる所に生ずる生成開展であつて、決して單なる擴張分裂を意味するものではない。『むすび』といふ語がよく指示する如く、結ぶことゝ生ずることゝが、同一義に歸する開展である。詳言すれば、產靈は生むことを契機として、宇宙萬有を理解せんとする思想であつて、產むことは夫婦關係、親子關係、兄弟姉妹の關係を生ずるのであるから、是等の家族關係に於いて、宇宙を理解し、世界を理解し、國家を理解せんとするものである。それは一個の存在を、祖先と子孫との體系に於いて、本家と分家との組織に於いて、理解せんとするものであつて、無限の生成に拘らず、その全體は常に一體の家族であり、無限の開展に拘らず、その體系組織たる自然秩序は永久に不變である。斯くして、還元性の陰

極と、開展性の陽極とは、方法論の中に一體に歸せられ、圓融無礙の哲學は、創造開展の哲學に同化し、還元歸一の道德は、生成飛躍の道德に同化するのである。

惟ふに、東洋文化が哲學、倫理等の精神的方面に於いて卓越せる如く、西洋文化は科學、產業等の物質的方面に於いて卓越せるものである。前者は陰性、還元性なることを特徵とし、後者は陽性、開展性なることを特徵とする。而してこの二つは、共に人生社會の發展に缺くべからざるものである。眞の人類文化は、この二つを圓融無礙に一體化する所に於いて完成する。而してその完成する所は、即ち日本に外ならぬことは、以上の所論によつて明かであらう。全世界の悲痛なる苦惱の根源は、その文化の偏寄歪曲にある。是を是正し、圓融ならしむることは、將來の日本文化の偉大なる使命であらう。

第六篇　日本文化の本質

第一章　遠古の日本文化

太古の日本文化は、人類の遠古文化の結晶であり、近世期に至るまでの歷史上の日本文化は、その結晶を中核とする東洋文化の結實であり、將來の日本文化は、その同じ中核の上に成就せられる世界文化の結實でなければならぬ。

人類の遠古文化とは、人類の發祥地たる亞細亞の遠古文化のことであり、日本古典の用語によつて、高天原文化と言つてもよいであらう。その遠古文化が、最も純粹に日本に於いて維持せられたのは、日本が日出國として亞細亞の極東に位し、地理的事情がよく大陸に於ける急激なる文化の變遷から免れることを得せしめたことが一つの要因であらう。從つて、大陸に於ける文化の發達に比して甚だしく遲れたことも當然である。大陸に於いて

は既に青銅器時代を過ぎて鐵器時代に入つてゐた時に、日本には尙ほ石器を使用する人々がゐたといふやうなことも例證されてゐる。印度に於ける佛敎の興隆、支那に於ける諸子百家の學術勃興時代にも、日本にはそれ等に比すべき敎學の發展もなく、後世に至つて始めて輸入せられた有樣である。しかしながら、斯く文化の發達變遷が後れてゐただけ、それだけ遠古文化の集約と維持とが强固に遂行せられたのである。

そこで問題になるのは、その遠古文化とは如何なる內容のものであるか、又それを固執するだけの價値があつたかどうか、といふことである。遠古文化とは、有史以前の人類の文化、換言すれば人類をして人類たらしめた文化である。そのやうな幼稚な文化が、今日の文化と何の關りがあるか、と考へる人があるかも知れないが、それは妄斷に過ぎぬ。例へば、遠古文化に於ける發火方法の發明、冶金術の發明の如きは、爾來悠久に人類の運命を制するものとなつた。幾千馬力の蒸汽機關も幾萬噸の船舶も、要するにそれ等の遠古技術の延長開展に外ならぬのである。それと同樣に、思想上、政治上のことに於いても、遠

古文化の創見が、爾來悠久に人類の運命を制するに足るものがあつた。我々は日本の神典に於いて、そのやうな大思想、大原則を見るのである。その大思想とは、世界を一家族と考へる思想である。その大原則とは、その一家族の中にあつて君臣の分が嚴存するといふ原則である。而して、觀念と言語との素朴であつた遠古文化の特色として、何よりも實體と實行とを重んずることが全體の基調になつてゐた。

人類は團體生活によつて、その實力を維持するものである以上、團體包攬力を擴張し、その團體力を內部的に充實することは必須の要件であつて、その爲めに博愛、信義等種々の道德が說かれるのであるが、何れも全體を一家族と考へ、全世界を一家族と考へる根本思想には及ばない。後世の道德思想は何れもその根本思想の枝葉末節たるものである。又團體が組織體たる爲めには、帝王、大統領、總統、委員長等、名義の何たるを問はず、中核體が必要であつて、組織の實質は統治であり、統治の基礎は君臣の分であるといふことは、悠久の眞理である。人類の遠古文化の偉大なる遺產として、爾來悠久に人類の運命を

定めるものとして、農耕殖產及び外敵防衛等の根本技術と共に、是等の大思想、大政治原則が擧げられねばならぬ。而して日本太古の文化は、是等の遠古文化を純粹に集約し、これを永遠に固執する基礎を確立したことに於いて、世界に類例を見ざるものである。その例證は、古事記、日本紀、古語拾遺等の日本古典上に餘りに明白である。

人類の團體生活は、後世に至つて國家、社會、或は協同體等樣々の名稱を以て呼ばれるが、その本質は何れも遠古の名稱たる「國」以外に有り得ないのである。而して國は、一國一家の團體であり、一君萬民の組織體であることを根本要件とする。此の組織體が悠久なる爲めに、萬世一系の皇位を基礎とし、此の基礎の上に一國一家が實現する爲めに、君民一體の大義が生ずるのである。此の至高の原則は、即ち日本國體の原理であつて、世界に卓絕せる日本文化の根本特質である。

斯くの如き不易の根本價値を有する遠古文化の珠玉を保つ國を、神國と稱へることは極めて當然である。北畠親房卿が神皇正統記の冒頭に、

大日本は神國なり、天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ、我國のみ此事あり、異朝には其たぐひなし、此故に神國と云なり。

と論じたのも、本居宣長大人が直毘靈に、

皇大御國は掛まくも、可畏き神御祖天照大御神の御生坐る大御國にして、大御神大御手に天つ璽を捧持して、萬千秋の長秋に、吾御子のしろしめさむ國なりと、ことよさし賜へりしまに〳〵、天雲のむかぶすかぎり、谷蟆のさわたるきはみ、皇御孫命の大御食國とさだまりて、天下にはあらぶる神もなく、まつろはぬ人もなく、千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とまし〳〵て、天つ神の御心を大御心として、神代も今もへだてなく、神ながら安國と、平けく所知看しける大御國になもありければ云々。

と說いたのも、皆此の根本義を闡明したものに外ならぬ。德川時代の慈雲飲光尊者は、山岡鐵舟氏が日本の小釋迦と言つた大德で、佛敎の大家であつたと共に、葛城神道といふ一

流を開いた神道家であつたが、敍上の根本義を說くこと頗る明快に、

君臣は義を以て本とす、國の綱紀なり、その君臣の道を言はゞ、我朝實に萬邦に勝るべし。

と言ひ、

我國に在ては、此天柱古今不易にして、國家を鎭護す、此を國に受得て國柱と稱す、（中略）有人云、今民家に至るまで、家宅中心の柱を以て此を表す、名を易にかりて、大極柱と云なり。

と說き、國體の本義に言及して、

上下の分を混ずべからざるを知りて、君臣同一體の如し。

と要約し、日本が世界の宗國たる所以を力說して、

その國よりして言はゞ、何れの國か中國ならざる、何れの國か宗國ならざる、支那に自ら中華と云ふが如き是也。若支那の人我朝に來て、自ら中國と稱せば、自誇の謂也、天下の公言に非ず。今偏頗の情をすてゝ唯道の在る處を知るべし、家に諸子あるが如き、才不才を論ずべからず、長兄を宗子とす、父の後を受くるを宗子と云ふ。國も亦爾り、大小によらず、初に闢けしを宗國とす、開國の統を守るを宗國とす、此道の在る處なり、この道の有る處是れ中國なり、我國最初に闢ける是れ宗國なり云々。

と論じた。是等の諸先覺の卓說は、時代を超越して、その眞價を發揮するものである。

第二章　歷史上の日本文化

奈良朝以降の歷史上の日本文化は、支那及び印度よりの輸入文化の同化發展に於いて、顯著なるものがある。簡單に言へば、是等の亞細亞大陸文化は、日本に於いて結實したのである。その結實したといふ理由は、日本には是等東洋文化の中核たり、極致たるものが存在して、よく是等を受容し、消化し、育成することが出來たからである。支那文化が滔々と輸入せられても支那化せられず、印度文化が潮の如く輸入せられても印度化せられ

ず、しかも是等の文化を充分に受け容れ、消化して、日本獨自の發展を遂げ、支那の古代文化が支那に於いて衰頽した後も、日本に於いては其の眞髓が潑溂と活き、印度の精粹文化が印度に於いて殆ど滅亡した後も、日本に於いて愈々生長し發展したといふことは、東洋文化が日本に於いて結實したことを文字通りに證明するものである。それ故に、日本文化は東洋文化の精華であり、その極致であると言つても差支はない。

前段に述べた遠古文化の結晶は、即ち東洋文化の源泉であるから、歴史時代の東洋文化が日本に於いて、日本の固有文化を中核として發展し、日本に於いて結實したことは、素より當然である。換言すれば、支那及び印度の文化は、日本の遠古文化を開展し、敷衍するものに外ならなかつたのである。從つて又日本に於いては、その開展敷衍に役立つ純良な部分だけが受け容れられ、他の不純な部分が淘汰せられたことは、言ふまでもない。例へば、支那の儒教の論説の中には、當時の王侯の意に迎合してその高祿を食むといふやうな、功利的な目的を持つて説かれたものも少くなかつたが、日本ではそのやうな邪心を混へず眞面目に研究し、その精神を純粋に把握することに努めたのである。又例へば印度の原始佛教は、小乘教であつて、大乘教は後世の所謂大乘諸家が佛陀の名に於いて開展したものであり、その組織的な學理は主として支那に於いて發達したものであるが、日本へは小乘教も大乘教も多くの論釋も、殆ど同時に輸入せられた爲め、却つてその取捨判斷を容易にし、特に優れた大乘諸教が日本思想として活き、日本に於いて愈々發展することゝなつた。

斯くの如く、東洋文化の結實としての日本文化の諸相を述べることは、頗る廣汎に渉つて此の小篇の到底企て及ばない處であるが、その代表的なものゝ一つとして、弘法大師の哲學を少しく述べたいと思ふ。言ふまでもなく、大師は平安朝初期の文化を代表する學者であつて、和漢梵の各語學に精通し、佛教哲理の堂奥に入り、書畫彫刻文章等の一流大家であるのみならず、又土木工學の達人、建築工學の巨匠であり、東洋文化の日本的代表者にふさはしく、その哲學は東洋哲學の最高峰に位すると共に、よく日本の固有文化の中核

精神を展開する學的素地を與ふるものであつた。弘法大師の著作の中、特に理論的方面に尊重せられるものに即身義があるが、その中に散見する二三の重要なる思想を指摘したいと思ふ。

第一は六大無碍の說である。六大とは地水火風空識の六つを言ひ、宇宙の要素を極めて素朴な方法で分析したものであるが、その說の要點は、物質界と精神界との無礙觀である。大師之を說いて『諸の顯敎の中には四大等を以て非情と爲す、密敎には則ち此れを說いて如來の三摩耶身と爲す、四大等心大を離れず、心色異なりと雖も其の性即ち同なり、色即ち心、心即ち色、無障無礙なり』と。それ故に、精神は物質的形態を離れず、物質的形態は精神を離れず、大日經の秘密漫荼羅品に『能く隨類の形、諸法の法相を生ず』云々とある一節を、大師が特に力說したのも、此の爲めであらう。

第二に擧ぐべきは、『重々帝網名即身』といふ有名な大師の學說である。重々帝網といふのは、華嚴哲學の用語である。一即多、多即一、部分即全體、全體即部分、事象と事象との圓融無礙なることを說く華嚴の事々無礙法界觀を表す言葉である。大師が六大無碍といひ、重々帝網といふのは、華嚴哲學を借りて即身義を說くものであるといふ批判が、一般に行はれてゐるが、當にその通りで、印度で起つて支那で發展した東洋哲學の窮極が、事々無礙法界觀であるといふことを洞察したのは、大師の識見である。而して、此の見地に立つて人身を說明し、『彼の身即ちこれ此の身、此の身即ちこれ彼の身、佛身即ち是れ衆生身、衆生身即ち是れ佛身なり、不同にして同なり、不異にして異なり』と言つて、東洋的自身觀の根底を明にしたのは、一大卓見であつた。

第三に擧ぐべきは、大師の因果超越論である。曰く『諸の因果を樂欲するもの彼の愚夫能く眞言と眞言の相とを知るに非ず、何を以つての故に、因は作者に非ずと說けば彼の果も則ち不生なり、此の因、因すら尙し空なり、云何が果あらんや。當に知るべし、眞言の果は悉く因果を離れたり』と。後世の道元禪師の前後裁斷の時間論も、これと趣きを同うするものと考へられるが、現象繼起の原理に關する斯かる深遠なる考察が、如何なる意義

を有するかは、能く識者の了解する處であらう。

凡そ是等の諸說は、世界哲學界の最高問題を論ずる第一流の學說であつたと言つてもよい。而して是等は同時に、日本の固有思想を開展する好個の學的基礎を與へるものであつた。日本の神典の根本思想は、國土山川等を決して非情のものと考へず、是等を悉く神とし、善も惡も等しく神として尊び、生も死も共に靈として拜するのである。當に事々無礙世界觀である。而して、そのやうな世界觀に於いてのみ、一國一家、世界一家の家族主義が可能である。又自身觀に於いて、此の身即ちこれ彼の身、彼の身即ちこれ此の身といふ彼我一體觀は、同樣に家族主義の極めて肝要な礎石である。略言すれば、彼我一體觀は事々無礙世界觀の社會原理である。これによつて東洋思想に於いては、如何にしても眞の個人主義は發達し得ず、必ず團體主義となつて、特に日本に於いてその强固なる發展を見たのである。

要するに、弘法大師によつて表現せられた東洋哲學は、日本の家族主義、團體主義の學

問的基礎を與へるものとして頗る有用である。而して、斯く徹底せる家族主義、團體主義の基礎があればこそ、君臣の分と忠の大義とが絕對的に確立するのである。換言すれば、徹底せる政治的、經濟的乃至社會的一體主義の基礎の上に於いてのみ、眞の君臣關係は確立するのである。此の基礎を失つた君臣關係は、一種の對立關係であつて、僞善にあらずんば、爭鬪に墮する。日本文化の基礎は、徹底せる一體主義であるといふことは、最も肝要な點である。

第三章　將來の日本文化

現在及び將來の日本文化は、日本固有の中核文化の上に成就せられる世界文化の結實でなければならぬ。今日の日本は、世界の日本として存在し、今日の日本人は、世界の日本人として存在するのであるから、日本文化は即ち世界文化である。歷史上に、支那の儒敎が日本儒敎として、印度の佛敎が日本佛敎として發展した如く、明治以降に輸入せられ西

洋科學、西洋技術、西洋經濟學、西洋法律學等々は、各々日本科學、日本技術、日本經濟學、日本法律學等々として發展しつゝある。滔々たる西洋文化の輸入を以てしても、日本は決して西洋化せられず、殆ど西洋文化を消化し盡した時に、その中に含有せられる多くの缺點、弊害を認識して、國體明徴、日本精神顯揚の聲が國内の各階層より發せられ、個人主義、自由主義、對立主義等の西洋文化の誤まれる部分を淘汰し去らんとすることは、日本固有の中核文化がよく全世界の文化を淨化し、將來に於いて是等を愈々日本的に發展せしめんとする傾向を示すものである。

言ふまでもなく、西洋文化は科學と技術とに於いて特に優れたるものがある。而して、其の科學思想を以て人生社會の全般を律せんとするものである。然しながら、傳統的な西洋科學思想は、決して完全なる科學思想であるとは言ひ得ない。一例を擧ぐれば、科學的思考の基礎をなす數學に於いて、零及び負數といふ思想を導入したのは印度の數學に始まる。總て西洋科學思想は、プラスの一面、陽性の半面に偏寄して、マイナスの一面、陰性の半面を閑却する通弊があつた。それが人生社會上の思考にも及んで、例へば國民經濟を思考する際にも、プラスの預金が增加する階層のみに着眼して、マイナスの借金が增加する階層を閑却するやうな傾向があつた。總て思考の方法が對立的であつて、善のみを强調し、生のみに執着するやうな國民性に於いては、斯かる偏寄は止むを得ないのである。然しながら、全體を家族的に認識し、彼我を一體的に考へる東洋思想に於いては、斯かる偏見は本質的に許されないのである。數の觀念が、印度數學によつてプラスとマイナスとの全面に及んだ如く、あらゆる科學も東洋的思考方法によつて全面的成果を獲るものであらう。

斯くして、全世界が家族主義的、一體主義的思考に還元する時は、日本固有の文化の中心、即ち遠古文化の珠玉が、その眞意義と眞價値とを全世界に認識せられて、世界が日本化する時である。これを逆の半面より言へば、日本文化の世界化である。今日の日本人の最も重要な任務は、日本文化の世界化である。その爲めに、思想運動も、軍事行動も、或

は外交手段も必要なのである。然しながら、日本文化の世界化は、決して對外行動のみに限られた問題ではない。就中重要なのは、日本國内に於ける日本文化の世界化である。何となれば、今日の日本國民の實際生活は、世界的生活であるからである。日本文化は決して骨董品でもなければ、單なる觀念でもない。今日の政治上、經濟上、道德上、乃至國民生活の實際上に具體化せられる活きた具體的事實でなければならない。而して今日の政治、濟經、道德、乃至國民生活は、世界的基準に立つものであるから、日本文化は即ち世界的日本文化でなければならぬのである。

日本文化の中核は、既に屢々述べた如く、君臣の大義である。氏族制時代の末期に於ける豪族の跋扈、或は封建時代に於ける群雄割據の如きものが、國體不明徵の甚しきものとされる所以は、臣にしてその分を越ゆる者を生じたからである。『天に双日なく、國に二君なし』との有名なる標語は、斯くして高唱せられたのである。而して今日に於いても、その形態は素より異るが、有らゆる方面に於いて、その本質上此の大義を紊すやうな傾向が若しありとすれば、國體不明徵の大なるものであり、同時に日本文化の最大の汚辱である。繰り返し言ふ。日本文化は決して歴史上の骨董品でもなければ、單なる觀念でもない。今日の日本國に活きる具體的な文化でなければならぬ。而して、日本文化の今日に於ける具體的實現は、昭和維新と呼ばれ、或は皇道の世界的顯揚と稱せられるものと、その實質を同じくするのである。』

昭和十六年二月十日印刷
昭和十六年二月十五日發行

著作權所有

新世界理論

【定價金壹圓參拾錢】

著者　河飯捨藏

發行人　東京市麴町區內幸町一ノ二ノ二　笠木良明

印刷人　東京市神田區西神田二ノ六　伊藤三郎

印刷所　東京市神田區西神田二ノ六　白鳳社印刷部　電話九段(33)一九二三番

發行所　東京市麴町區內幸町東拓ビル四階　大亞細亞建設社　振替東京三六六〇三番　電話銀座(57)二四一七番

月刊雜誌

大亞細亞

昭和八年五月創刊

▲亞細亞復興の指針
▲興國靖亞同志の外護
▲劃期的青年大陣容布
地の急務力唱
▲先覺・識者・體驗家を網
羅する一大指導機關
設置の提唱

定價三十錢・郵稅一錢

發行所 大亞細亞建設社
東京市麴町區內幸町一ノ二・東拓ビル四階
電話銀座(67)二四一七番
振替東京三六六〇三番

大陸版(華文)

大亞細亞

每月一册二十五日出版

發行所 蒙古巴盟興亞協進會本部
厚和市舊城

定價				
訂購辦法	册數	價格	郵費 國內及日本香港澳門	郵費 國外
零售	一	三角	三分	一角三分
預定半年	六	一元	一角	一元六角二分
預定全年	一二	三元	一角	一元三角三元五角

梁漱溟著
池田克己譯

鄉村建設理論

——一名・中國民族之前途——

四六版上製三八〇頁
定價貳圓五拾錢
送料（內地拾錢 外地貳拾錢）

安藤紀三郎中將閣下序文之一節

飜つて觀るに、中國の人口は、農民其の約八、九割を占め、其の社會機構は、政治、經濟、文化等あらゆる角度より見て、仍ち半封建的、半植民地的萎縮假眠の狀態に在ることは否むべくもない。

於是我が皇國と中國とが、直に提携協力して、聖戰の名に相應しき歷史的發展の內容を合作賦與する爲めには、物心兩方面に巢喰ふ、あらゆる個人主義的、自由主義的乃至資本主義的、共產主義的汚濁を排除拂拭し、自家本然の姿に立ち歸つて、亞細亞的新秩序建設の血と魂とを求めねばならぬ、然らざれば、歷史的發展の必然性に背戾する計りでなく、防共、親善と云ふ當面消極の協同聯關性から見ても、斷じて建設の意義を生かし得ないであらう。

發行所
大亞細亞建設社
東京市麴町區內幸町一ノ二・東拓ビル四階
電話銀座二四一七番・振替口座東京三六六〇三番